

～くぬぎの森～

第 21 号

2010年 2 月 1 日

熊本高等専門学校熊本キャンパス

図 書 館

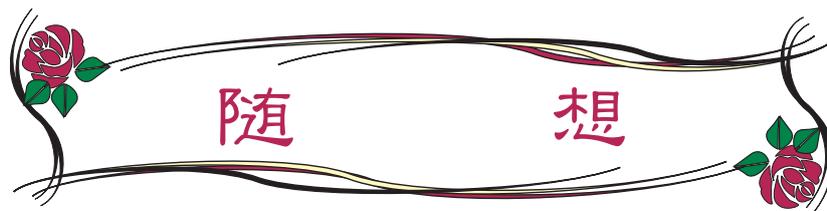


(スイセン)

目 次

〈随 想〉

これからの図書館	図書館長	三好正純	2
南の島へ行こう	人間情報システム工学科	村上純	3
「読書」	情報工学科 5年	梅本雅之	10
紙とインクの魅力	情報通信工学科 5年	小西遼	11
「熊本キャンパスの図書館」	2年2組	宮崎麻衣	11
図書館で働いて良かった所	情報通信工学科 4年	山下翔平	12
図書館で学んだこと	電子工学科 4年	長田大和	12
図書館勤務の感想	電子工学科 4年	金子貴博	12
図書館でバイトをやって	電子工学科 4年	藤本凜太郎	13
図書館受付の感想	電子制御工学科 4年	一郷華穂	13
図書館業務を通して	情報工学科 4年	三池伽奈	13
〈平成21年度第31回校内読書感想文コンクール 選考結果および作品紹介〉			
14			
〈第55回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査入賞者〉			
31			
〈高専再編にともなう特別寄稿〉			
さらばモールス船 (回想記) 熊本電波高等学校 特科8期・第2別科2期	宮都政一		32
〈図書館からのお知らせ〉			
図書館利用案内・お知らせ			37
ベストリーダー			38
「図書館だより」編集担当委員			40
編集後記	図書館運営委員 下田道成		40



これからの図書館

熊本キャンパス図書館長
三好正純

本校は今年度、平成21年10月1日に熊本電波高専と八代高専とが統合し、新しく熊本高専となりました。2つの旧高専はそれぞれ、熊本キャンパスおよび八代キャンパスとして運営されます。これに伴い本図書館も「熊本キャンパス図書館」と、少々長い名称になりますが、よろしくご願ひ致します。ところで、図書館はIT(情報技術)の進展に伴い、サービスのあり方もずいぶんと変化してきました。ここで、熊本キャンパス図書館とITとの関わりについて少し振り返ってみます。

熊本キャンパス図書館(以後、図書館)が現在の場所で開館したのは1974年(昭和49年)のことです。当時、コンピュータは電子計算機と呼ばれ、複雑な数値計算や大掛かりな事務処理に使用される以外、一般の利用はほとんどありませんでした。図書館でも蔵書管理や貸出業務といった事務処理はもっぱら手作業で、図書の検索もカードや台帳で調べるといった具合でした。その後1990年代に入りワープロやパソコンなどの情報機器が普及し始めると事務処理も少しずつ電算化されるようになりましたが、書類の作成や蔵書リストの記録をパソコンで行う程度で、利用者には大きな変化はありませんでした。しかし、1993年、インターネットのWWW(World Wide Web)が開放され、ウェブブラウザ(ホームページ閲覧ソフト)Mosaicが開発されたのを皮切りに、90年代後半から大きく変化してきました。図書検索は自校の蔵書だけではなく、他の大学や高専の蔵書も簡単に検索できるようになり、書籍購入のための注文もインターネットを使ってできるようになりました。また、利用者が調べものをするときに、これまで書庫から本を取り出し調べていたことを、インターネット上で検索ソフトを用いて調べるなど、インターネットを通じた情報のやり取りが主流と

なってきました。さらに最近ではインターネットが一般家庭にも普及し、家庭から図書館の蔵書を調べて貸出し依頼をされる利用者もあります。ITの進展とネットワーク基盤の整備により、図書館のサービスのあり方も大きく変化してきました。

さて、図書館の大きな役割は情報提供です。情報提供のメディアには、図書・雑誌などの書籍だけではなく、VTRやDVDなどの電子媒体も多くなりました。また、書籍については、これまでの紙に印刷されたものだけではなく、情報機器のディスプレイに表示する電子書籍(電子ブック)など、形態が多様化してきました。さらに、インターネットの普及は書籍の価値観にも変化を与え、2003年には有名なブリタニカ百科事典が書籍での出版を中止するなど、これまで永く続いてきた雑誌のいくつかが書籍としての姿を消してきています。一方、新刊の書籍も多くあり、専門書や長編小説などは紙媒体が好まれているようです。このように情報の電子化が進む中、メディアに対する価値観も多様化しており、図書館も様々なメディアに対応できる情報提供のあり方が必要になってきています。そのため、図書館では利用者が自由に使うことができるコンピュータを設置しており、図書館の蔵書検索のほか、インターネットに接続して各種の情報検索に利用されています。

以上、図書館とITとの関わりをみてきましたが、これからの図書館にはインターネットを通じた情報サービスと多様なメディアへの対応が要求されます。そこで、本校では熊本高専への変革に伴い、図書館を「ICT活用学習支援センター」の一部に組織しました。ICT活用学習支援センターは、ICT(情報通信技術)を活用し、本校の学生・教職員のほか、地域の企業・住民の方々をも対象に、学術情報の提供や共同研究・生涯学習の支援など、幅広い情報サービスを行うことを目的としています。図書館は今後も時代の要求に応じた、より良いサービスの提供ができるよう努めてまいります。どうぞ、よろしくご願ひ致します。

南の島へ行こう

人間情報システム工学科
村上 純

I. 民俗学

民俗学は、過去から現在まで、人々によって経験されてきたことを扱う学問である。かつて存在したものに意味のないものはない、という立場で、習俗や言葉、祭りなどをみる。

水俣市出身の民俗学者谷川健一氏の『民俗学の愉楽』（現代書館）の冒頭の一節である。古いものをたずねる学問には、歴史学や考古学もあるが、それらが古文書や遺跡・遺物などの形あるものに依拠して過去から現在へと辿るのに対し、民俗学はそうしたものが失われたところから始まり、昔話やいい伝え、地名などの民間伝承を頼りに、現在から過去へと遡って考察するものであると続く。ない所から、色々な情報を頼りにもとの姿を明らかにしていく、その先には普遍的な、我々の祖先の経験や知恵がある。何と魅力的な学問だろうか。

谷川氏は同書の中で、民俗学との出会いは柳田国男の書物によってであったと書いている。柳田国男は日本の民俗学を築いた人物であり、『遠野物語』はよく知られている。柳田の民俗学を解説した谷川氏の『柳田国男の民俗学』（岩波新書）によると、柳田が山の民から海の民に関心を移したのは大正6年からで、大正10年に沖縄への旅に出かけた後に、「沖縄の有識階級に属する人々は、如何なる瞬間も中央の文化の恩恵が、孤島の端に及ぶこと^{あまね}遍からずして、時運が彼等を後に取残して進みつつあるのでは無いかを、気遣はざる時とてはない」が、他方「沖縄の中部日本に対する関係と、至つてよく似た外様^{とごま}関係を以て、沖縄自身に従属する更に小なる孤島あることを忘れんとし、又往々にして之を取残して独り進まうとしたのである」と話しているという。谷川氏は「柳田は、沖縄の知識人が日本の中央文化の恩恵の沖縄にも均霑^{きんてん}されることのないのに焦燥するのは、日本人が海外の情勢に遅れはしないかと気をもむ姿を映し出す鏡であることを指摘している」と書いている。

柳田は、沖縄からさらに先島へ、「その中でもさいはての小さな島々へと無限に降りていく。」「南島

においても大なる島は小なる島のことを忘れ、小なる島はさらにその下の島のことを忘れがちであることを警告する。それはあたかも日本が世界の文明国に伍して遅れまいとし、沖縄島の存在を無視する傾向と相似の現象であ」って、日本とは柳田のいう通り「言はば少々大規模なる世界の沖縄島である」。ところが、「中央文化の恩恵が」及ばない「見棄てられた」島であることは、逆に、民間の伝統が長く保存されてきたことになるから面白い。

『民俗学の愉楽』には、日本本土では弥生時代初頭の紀元前3、4世紀に伝わった鉄器が、沖縄に導入されたのは13世紀で、太陰暦も18世紀初頭まで伝わっていなかったとある。『甦る海上の道・日本と琉球』（文春新書）は、谷川氏が「柳田の後塵を拝して今にいたるまで南への志向もだしがたく」書いたもので、この中で氏は次のように書いている。

人間社会において文化は漸進するのではなく、一挙に開花することがしばしばである。わが南島もこの例に洩れず、琉球社会は十一、十二世紀に入ると劇的に突如変化を見せる。それまで、沖縄本島では貝塚時代、先島では無土器時代がつづいた。八重山ではそのような石器時代が千年もの間存在した。この気の遠くなるような原始生活の長い眠りからゆり覚まされたのは、日本から与えられた文化の衝撃によるものだった。

柳田は、人々の生活の最も凝縮された社会が島であって、面積の大小に関わらず、島の本質は同じと認識することで、日本の民俗の全体像を把握しようとした。「こうして柳田の創始した日本民俗学は、日本の原質を、粟散^{あまね}辺土の島に求める道を歩きつけた。」それはこうもいえる。

たえず海外諸国の文明の動向を気にする有識者の視線を、大なるものから小なるものへ向け変えようとする思い切った試みであった。それはまた、日本に圧倒的な影響を与えてきた中国文明や西洋文明の価値の尺度を、そのまま日本社会の尺度とすることへの否認にはかならなかった。

II. ヤシの実

唱歌「椰子の実」の詩は、柳田が学生時代、愛知県の渥美半島の伊良湖岬の浜辺に打ち寄せられていたココヤシの実を見つけ、友人の島崎藤村に話した

ところから生まれた。このエピソードで知られる『海上の道』は柳田の晩年の著作であり、「民族渡来の海の道」と「日本人の他界観」を考察したものであると谷川氏は『柳田国男の民俗学』で書く。沖縄の海は、干瀬ひしと呼ばれる暗礁に取り巻かれて、二重になっており、干瀬の内側の「目もさめるような青」の日常空間に対して、外側の彼方は「どす黒い波がうね」る「死んだ人の魂だけがおもむく他界であった。」この現世と他界が一望に見渡せる沖縄の海が好きだと氏はいう。「現世の悲哀と他界への思慕をこめたこの風景を一語で」表すと、「かなし」が相応しく、沖縄では今でも「かなし」を「悲し」と「愛しかな」の両方に使っていると氏は書いている。日本人の他界観には、「空間的他界と時間的他界の二つの意味が複合されて」おり、これらを追求するために、柳田は上述の2つを考察したのである。

与那原恵氏の『サウス・トゥ・サウス』（晶文社）の第3章「東京／南島流離譚」はJ T Aの機内誌『コーラルウェイ』に載せた文章をまとめたもので、それによれば、柳田は伊良湖岬でヤシの実を目にして、はるか遠くの海を思って「南の海恋しくなりぬ」と書いているそうだ。また、明治40年には笹森儀助の『南嶋探検』を読んで沖縄への関心が高まった。「このころから沖縄に関する文献を熱心に読むようになり、さらに決定的な一冊の本と出会う。」伊波普猷の『古琉球』である。沖縄出身の民俗学者で「沖縄学の父」とも呼ばれる伊波は、東京帝国大学で言語学を専攻後、沖縄で琉球研究を行った。伊波からこの本を贈られて、柳田は衝撃を受けたようだ。伊波の『おもしろさうし』（16～17世紀に編纂された沖縄の古い歌集）の研究は、「沖縄学」の端緒となった。「おもしろ」とは、沖縄の古い歌謡のことで、語源は「思い」を表す「うむい」とのことである。

与那原氏の両親は沖縄生まれで、演劇の道を志して上京した母の後を父が追って、東京で結婚。数年後「彼らの故郷の南の島は凄惨な戦争に巻き込まれてしまい、「帰郷もままなら」なくなった。末っ子だった与那原氏が17歳のとき父が亡くなった。その5年前に母も亡くしている。夏の真夜中両親がひそひそ話をしている「しっとりとしていてやわらかで、独特のリズムのある言葉、ウチナーグチ」が懐かしく思い出され、与那原氏が沖縄に通うようになった

のは父の死後のことであった。母方の祖父は、「沖縄で生まれ、東京で医学をおさめたあとロシアに行き、のちに台湾・台北で長く医院を営んでいた」。その祖父とともに母は2歳で台湾に渡った。その一家のことを書いたのが、『美麗島まで』（文藝春秋社）で、この本もお薦めである。ちなみに、1544年頃ポルトガルの商船が航海中、「青々とした木々が茂り、雄大な山がそびえている島を発見し」、「イラ・フォルモサ（なんて美しい島だ）」と叫んだ。この「フォルモサ」に漢字をあてはめたのが「美麗島」で、台湾のことである。なお、昨年6月には『まれびとたちの沖縄』（同氏、小学館新書）も出た。

笹森儀助については、1845年に陸奥国弘前に生まれ、「北は千島、南は琉球・台湾までつぶさにあるいて民情を明らかにし、多くの記録をのこした。のち奄美大島島司として島の開発につく」した人物であると、民俗学者宮本常一が『辺境を歩いた人々』（河出書房新社）で解説している。「旅する民俗学者」として著名な宮本について、佐野眞一氏（後出）が編集した『KAWADE 道の手帖 宮本常一』（河出書房新社）の中に、佐野氏と谷川氏の対談「今なぜ宮本常一なのか」がある。

1950年代の初めに、平凡社で児童百科事典の編集部にいた谷川氏は、その仕事の中で民俗項目に興味を覚え、それに繋がる仕事をしようと宮本を仲間に入れた。その企画をするきっかけになったのは、通勤電車の中で読んだ柳田の『桃太郎の誕生』で、「日本の庶民が想像力を駆使して、新しい民話をつくっていくクリエイティヴなところに驚嘆」した。そのとき、「俺にも人生の成熟の最初のひとしづくが落ちてきたのかな」と思ったという。

Ⅲ. 海上の道

さて、『海上の道』に関して、私が特に面白いと思うのは、色についてである。『民俗学の愉楽』の記述を参考にすれば、古代の日本には色の呼称が赤、青、白、黒の4つしかなく、沖縄では戦前までそのようであったらしい。死者は洞窟に葬られ、そこで一時休息する。その世界を包んでいるのが「青の世界」で、誕生は「シラ」と呼ばれ、「白」で表される。つまり、「南島は、青から白へ、白から青へと循環する世界であった。」

谷川氏の民俗学が、「青銅の青、沖縄の海の色、なかんずく他界の色である青をキイ・ワードとして

いることから、「青の民俗学」であるのに対して、「白の民俗学」を提唱したのが、前田速夫氏である。『白の民俗学へ』（河出書房新社）の中で、前田氏は、柳田の著作はどれも面白く、「何度読んでも、あらたな感動や発見がある」が、中でも1つだけ選ぶとすると、「躊躇なく」『海上の道』であると書いている。

柳田が提示した、稲の蔵置場と人間の産屋を、琉球列島の一部では、何故共に「シラ」と呼ぶかという疑問について、前田氏は分かり易く答えている。すなわち、人間に魂があるように、すべての生きものには魂がある。植物ももちろんそうである。その魂は不変ではなく、老朽化する。人間が老いるのと同様に穀物も実り収穫される。稲が来年も実りを迎えるためには、人間の産屋と同じく、次の魂を誕生させるための稲積み稲の産屋であった。つまり、稲の産屋を意味する「シラ」が、人間の誕生や再生を意味するようになった。また、「シラ」は「白」と結びつくのであるが、その「シラ」には仏教思想が加わるずっと以前から再生の願いが込められていたと前田氏はいう。その「シラ」の本源とは、アイヌ語との関連や、エスキモー・シャーマンの言葉から、「<シラ>とは自然物に宿る精霊にはかならないと結論している。

「シラ」と南島といえば、私に連想されるのは不知火である。前田氏は、これについて、八朔（旧暦の8月1日、新暦では9月初旬頃）に有明海や八代海に現れる現象であり、万葉集の表記を確かめたところ、「シラの火」あるいは「シラの日」と読めることに「大きな驚きを覚えた」という。

植木町出身の江口司氏は、『不知火海と琉球弧』（弦書房）で、八朔の行事の1つに稲作儀礼があって、九州ではちょうど稲の穂出しの季節となるので、その豊穰を祈る「田誉め・作頼み」となり、また二百十日がこの頃なので、季節風を警戒する風祭りと重なって重要視され、この日に祈る所も多いとしている。また、八朔に関しては、「八朔の雪」や「八朔の白妙」もあり、それらについて次のように書いている。

八朔の日に吉原の遊女が全員白無垢を着ることを表現している言葉だそうで、そんな風習があったという。なぜ白無垢を着たのかを私はまだ調べていないが、案外こんなところに

「シラ」にかかわる重要な問題がひそんでいるのかもしれない。

江口氏は「ヤブサ」をキーワードにして不知火海沿岸を歩いた。氏は、民俗調査の際に出会う「小さき神々」が「たまらなく好き」なのだそうだ。

小さき神々は、豊かすぎる現代社会からは想像もできないかつての暮らしの中に根付き、人々に頼られ心の支えとなってきた。ある時には恐れられ、遠巻きに祀られる神であった。だが、そのような小さき神々は今、刻々と消え去っている。

「ヤフサさん」とも呼ばれ親しまれる「ヤフサ神」あるいは「ヤブサ神」は、

神仏混交の時代に不知火の地に広まったのであろう。後に、為政者の力が影響した新しい神社の隆盛にとって変わられ、本来の性格など忘れ去られてしまった。村人が捨てられない集落神として昇格するが、それ故に零落し、小さき神になってしまったと思えるのである。

「ヤブサ」を追って不知火海沿岸を歩く氏の旅は、沖縄まで足を伸ばすことになる。その沖縄の創世神話の聖地とされる久高島（比嘉康雄著、『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』、集英社新書に詳しい）から海上を望んで、不知火の語源を思ったそうである。

「シラ」は、白々と夜が明ける再生の意であることに違いない。「ヌイ」は南島でいうところの「根の国」ニライカナイの「ニナイ」だ。そんな造語が思い浮かんだ。「シラニナイ」は、生まれ清まり、再生をもたらす常世の海ではなかったかと。

この本は2007年の第28回熊日出版文化賞受賞作である。江口氏は一昨年3月、三角半島に1人で釣りに出かけ、崖から転落するという不慮の事故で惜しくも亡くなった。熊本日日新聞の追悼記事（4月30日付）に、氏は熊本市で看板業を営む傍ら、山歩きや溪流釣りに熱中し、九州脊梁山地を中心に自然保護活動に取り組んだとある。そして、次第に山里の暮らしや信仰などに関心が移り、山ばかりでなく海辺から南島にまで向った。写真家としても優しい目線で、野の花や祭り、里人などを撮った。「その優しさは、研究の成果とともにつつましく暮らす里人に、たくさんの自信や勇気を与えた。」氏の遺著『柳田國男を歩く』（現代書館）は、同紙への連載に

加筆された原稿を、著者の死後に前山光則氏（あとがき執筆、元人吉高校定時制教諭）等友人達の協力により出版されたもので、「心優しい性格」であったという氏の人柄を髣髴とさせる良書である。

IV. 琉球弧

『海上の道』に戻る。『柳田国男の民俗学』には、昭和44年から同52年までの8年間に玄界灘の一隅に漂着したココヤシとニッパヤシを600個採集した報告があると記載されている。『遙かなる海上の道』（小田静雄、青春出版社）によると、石垣島で、柳田にちなんで1988年からプレート付きのココヤシの実を毎年1回流したところ、2001年にその年の1個が黒潮に乗って1600キロ離れた伊良湖岬に漂着したそうである。小田氏は書いている。

黒潮の規模は幅50～100キロメートル、深さ200から1000メートル、毎秒250～6500万トンで、最大流速は2～7ノット（1ノットは1時間に1852メートル進む速さ）にも達する激流である。

この「世界最強、最大級」の黒潮は少なくとも1万年前頃には房総半島沖まで達していたという。

江口氏の本のタイトルにも用いられていた「琉球弧」という言葉は、「日本が弧状列島である、という地理学的発想に基づいて、作家の島尾敏雄が提起したものである。そう書いて、その発想を参考にして黒潮をめぐる文化圏を眺め直し、『黒潮の文化誌』（南方新社）という本にまとめたのは日高旺氏である。黒潮は海上交通の幹線としての意味が大きいと次のように氏はいう。

科学技術が未熟な昔、文化の運搬は、風（季節風）と海流の力に大きく頼っていた。冬季と夏季、逆方向に吹く二つの季節風の助けを借りて、北からの文化と南からの文化が、ゆっくり交互に流域へ運ばれたものと想像できる。

そして、この文化の運搬は、北から南へは島伝いに琉球弧に沿って行われたことが考古学的に実証されているが、南からの文化も、稲作以前の日本の基層文化に、その痕跡が色濃く残っていることには注意しなければならないと述べている。捕鯨国と反捕鯨団体との衝突のニュースが最近もあつたばかりであるが、この本の3つの章のうちの1つは「鯨の物語」に充てられており、日本人必読であろう。著者

は鹿児島出身で、南日本新聞社や鹿児島テレビ放送の社長を務めた後、島尾の薦めにより地元の短大の非常勤講師として「黒潮文化論」を講じ、学生から「クジラの先生」と呼ばれているそうである。

ニライ・カナイのニライとは、「根の国、底の国」といった意味で、カナイは琉球方言に多い豊語であろうといわれる。根の国、底の国から転じて、海のかなたの楽土、奥底の知れない遠い神の国を意味する。ニライ・カナイの国からきた神との結びつきは、沖縄の古代宗教の一つのパターンである。

これは、『新南島風土記』（新川明、岩波現代文庫）の一節である。沖縄出身の新川氏が新聞記者として八重山の支局に赴任したのは今から40年ほど前のことで、この本は沖縄タイムス紙に1968年から1年余りに亘って連載された記事がもとになっている。当時の「八重山についての沖縄本島人のイメージはとてつもない僻遠の島」で、「那覇生まれの家内は、まるでアフリカの奥地にでもやられるかのように嘆き悲しんだ」そうである。新川氏は「小学校にあがる前の年から敗戦のあくる年まで、約十年のあいだ石垣島で過ごした。」「夫を亡くした母が、三人の子どもたちを養うために、」島で教員をしていたからである。

石垣島に着いた日から、流人の悲哀と故郷に帰りついた者のよろこびが私の内がわで交錯し、そのうえに、逃げるように島を出て戦火の後も生々しい沖縄本島に引揚げた時の屈折した思い出が重なって沸騰したのは自然のいきおいであった。

島で「^{らん}だな日をおく」っていた著者に、読み物風のレポートを書く企画が与えられると、八重山に少年時代を過ごした自身も、その「島々について如何ほどのことを知っていると言えようか。」

那覇からみれば、さい果ての辺地と考えられる石垣島にあって、そこからさらに辺地とみられる離島の数々。その島々に生きる人びとの生きざまを、それぞれの島の歴史風土のなかでとらえ返し、共有するための努力を重ねることこそが、流動する苛酷な時代と本源のところで対峙することになるのではないかと

と「意を決し、島々へと向った。」やはり島尾敏雄の勧めにより1冊の本にまとめられたのは、沖縄の

「日本復帰」後の1978年のことである。「予想されたとおり沖縄のすみずみに至るまで日本に侵食されて、目に見えるものも急速な崩壊へと向かいつつある」中で、「崩壊しつつある土着の文化を前に、「島々の根っこのところでそのエネルギーを掘りおこし、とらえ返す営みを深め」たいとの思いがこもっている。さらに、それから27年後に出されたこの文庫版のあとがきには、次のように記されている。

現在の八重山の状況しか知らない読者にとってみれば、本書はあたかも遠い異国の物語のように感受されるかも知れないが、如何に表層の変貌が烈しくても根源のところには島に生きる人びとの変ることのない魂が息づいているはずである。

V. ヤポネシア

『名も知らぬ遠き島より』（三五館）という本がある。著者はノンフィクション作家の日高恒太郎氏である。氏は種子島出身で、「都会への憧れ」から中学生のときに島を離れた後、鳥羽商船高専を卒業して外国航路の航海士となり、その後「陸上がりの河童」となり放送作家を経て、ノンフィクション作家となった。しかし、「物書きとして人並みの生計をたてることもままならない」家庭生活は破綻し、「東京の生活を捨てて故郷に逃げ帰ろうとし」て、種子島、屋久島、吐噶喇の島々を遍歴した後に、9年がかりで完成されたのがこの本である。2001年に『島の食事』という書名で上梓された直後、発行元の出版社が倒産し、人目に触れることなく「おんぼろアパートの中で床が抜けるのではないかというほどの重さで平積みにされたまま」となった。それから5年して新しい出版社を得、「失ってしまった島の価値観を見直す」というコンセプトに変更して書き直されたものである。

故郷はどこですかと妙齢の女性に聞かれたときに、辺境の島を恥じる感覚が氏にはあったという。その裏側に「屈折した愛着とプライド」もあったが、種子島という「中途半端な離島に生れ育った」ことと、幼い頃の沖縄への強い憧憬があると思うようになった。民俗学的には、「ヤマト文化圏と琉球文化圏の境目が吐噶喇の最南端の島・宝島と奄美大島の間であり、奄美以南の島々は琉球文化圏に属する」という指摘があるそうで、その「境目」で「生き暮らす」「感覚」とは次のようなものらしい。

時代を超えて、島の人の「心」のなかでどうしても拭い去ることができないものがあるとすれば、「端っこ」で生き暮らしている「負」の感覚だ。希薄になってきたとはいえ、その辺境意識は子どもたちの心のなかに都会志向、「中央」志向の気分を醸成しやすい。

吐噶喇の島々を巡る日高氏の旅は、「としま」丸から薬を飲んで海に飛び込む覚悟を胸に秘めた、「死」を考えた旅であった。そのとき二等船室の中で耳にした、終戦間際に島々に不時着した特攻隊員にまつわる話と、それから思い出される子供の頃の「遠い記憶」から、目の前にあった「死」が次第に吹き払われて、もう一度東京に戻って、父母の時代の戦争に向き合ってみようと思い始めて書かれたのが、第54回日本推理作家協会賞を受賞した『不時着』（新人物往来社）である。この本は、「太平洋戦争末期に、九州本土から沖縄の海を目指して出撃した特攻隊員の生き残りの方々を訪ね歩いたルポルタージュ集である。」

末期特攻と呼ばれることのある沖縄・薩南方面作戦で戦死した者およそ二〇〇〇名弱、十八、九歳で軍国日本が美化した特攻へ送り出され、運命の不思議によって生き存えた彼らも、もっとも若い人がすでに八〇歳をこえている。

種子島で海軍航空基地を造成する挺身隊員として働いたことのある「母の導き」によって本ができて、「しばらくは生まれた島や沖縄をめぐる世界から離れたと思っていたの」にもかかわらず、その「思いとはうらはらに、現在もなお、南西諸島にからめ取られてしまっている。」そうして、出されたのが昨年9月の『辺海放浪』（新人物往来社）で、私はこれも興味深く読んだ。島尾敏雄が特攻隊員であったことはよく知られており、「ベニヤ板製モーターボートの先端に爆弾を積んだ特攻兵器」の特攻隊長として奄美諸島の加計呂間島に駐屯したが、出撃待機中に終戦になった。同書の第5章は「南洲幻視行」と題し、西郷隆盛の流された奄美諸島を扱っている。加計呂間島は大島海峡を挟んで奄美大島に隣接する複雑な海岸線を持つ島である。「ヤポネシア」という言葉は「日本」と「島々」を組み合わせたもので、島尾により造られた。日高氏はそのヤポネシアについて次のように述べる。

島尾敏雄のヤポネシア論は国権の歯車のひとつとして、命令したり、されたりする世界にいたくないという元特攻隊長としての本音が、戦後には可能な限り、「国」のくびきを断ちきり、大陸やその先のヨーロッパから切り離された島嶼群としてのイメージを結んでいったといい換えてよいような気がしてくる。

故郷で「再生」を果たし、受賞により作家としての地位を確立した日高氏はこういっている。

政治も経済も文化も、中央が絶対的な優位にある今の日本において、地方はどのような自立の道を求めればよいのか。／原稿との格闘を終えて、思うことがある。／「中央」とは、「私」が立つ場所にしかない。（『名も知らぬ遠き島より』）

「沖縄のように熾烈な戦闘もなかった奄美を占領したのは、安価で豊富な基地建設労働力を狩り出すため、アメリカがあらかじめ仕組んだ高度な植民地政策だった」とするのは、『阿片王——満州の夜と霧』、『甘粕正彦 乱心の曠野』（いずれも新潮社）で、昭和史の核心に迫ろうとする佐野眞一氏が、「沖縄列島を一個の肉体として見立て、その肉体が戦後に演じ、あるいは演じさせられた悲劇と喜劇、まばゆい光と濃厚な影があやなす南島奇譚ともいうべきドキュメント」で、「内地人をして戦慄せしめよ」というつもりで書いたという、『沖縄 だれにも書かれなくなかった戦後史』（集英社インターナショナル）である。佐野氏は島尾について次のように書いている。

作家の島尾敏雄は、奄美、琉球をヤポネシアと呼び、自分に加計呂麻島からの特攻出撃を強いた日本との相対化を試みた。／島尾は、琉球弧を、よって立つ歴史文化の古層がヤマトとは異なるヤポネシアと総称しながら、奄美と沖縄には同質性ととも異質性もあると注意深く述べている。

そして、「早期復帰を果たした奄美は、その忘却の波浪に洗われ、いまや日本と沖縄のはざまで、空白の琉球弧として宙吊りにされている」と続けている。600頁を超える浩瀚な本であるが一読の価値があると思われる。

島尾夫人である島尾ミホも夫と同じく作家として活躍したが、島尾は1986年に、ミホは2007年に亡く

なった。ミホは加計呂間島生まれで、島で教師をしていたときに島尾と知り合い、終戦後結婚した。『ヤポネシアの海辺から』（弦書房）は、ミホと石牟礼道子氏の対談である。その脚注や前山光則氏による解説を参考にして記しているのであるが、島尾は大正6年横浜市生まれで、九州帝国大学を繰り上げ卒業後、魚雷艇の訓練を受けて加計呂間に赴任した。ミホの父親は14世紀琉球三山時代の南山王の血を引いているそうで、彼女は東京で女学校生活を送ったという。17代続いているという家は、本土に離れている間に、アメリカ軍政下で事情も分からぬまま、屋敷は何も残っておらず、「すっかり山の姿になってしまって」、「帰郷への願いが、いつも胸中に切々とあふれて」いるとある。

対談の中で石牟礼氏は、日本人は「歌う民族であったかもしれない」が、「南島の方にはまだそれが色濃くあるような感じが」する。特に、「その呼び掛けの痛切さというか、哀切というのか」、「発声法が西洋音楽と全然違う声の質で、本当に玉の緒が切れそうな感じ」であると述べる。それに答えて、ミホはいう。

別れがづらいのは、戦時中、島尾は特攻隊員で出撃即時待機の状況でしたから、いつ出撃があるかわからないので、会ったとき、いつもこれが最後だと思っていましたから、それが四十何年も余韻を引いているのかしら、というふうに考えていました。

しかし、それ以外に、「別れがこれほどまでに胸を押し包みますのは、私が南島で育ったから」でもあるのだと、石牟礼氏の話聞いて分かったという。

琉球大学の岡本恵徳名誉教授（故人）の説として、「島尾が南方にこだわり続けるのは、結局はミホが南方の育ちだからだ」とミホは紹介している。私の思うに、日本人に連綿として受継がれてきた南島由来の「別れの切なさ」を、特攻待機という経験により呼び覚まされた島尾は、ミホに、ミホの生まれた南島に、空間、時間を超えて故郷を見たのだろう。鹿児島市の磯庭園で飼われているルリカケス（奄美諸島だけにしかない固有種）にミホが、「ヒョーシャーコー、ヒョーシャーコー、カンコー」と呼びかけるくだりには心打たれた（ヒョーシャーはルリカケスの方言）。

VI. 幸福の増進

柳田国男の『海上の道』および島尾敏雄の造語である「ヤポネシア」あるいは「琉球弧」を軸として、本県出身の谷川健一氏の著書を中心に、同じく県出身の江口司氏の民族学に関する著書、高専出身の異色のノンフィクション作家である日高恒太郎氏の南島関係の著書、そのほか幾人かの著作を取り上げたが、ここで少し視点の違う本を紹介したい。

柳田について「戦争を契機とした視点から」新たな問題提起を試みた、『柳田国男の民俗学がわかる本』（平成柳田国男研究会、秀和システム）は、次のように批判する。

1951年はサンフランシスコ講和条約、旧安全保障条約調印の年で、北緯29度以南の奄美や沖縄の南西諸島は日本の行政権から切り離されることになった（北緯27度以北の奄美群島は1953年に復帰）。柳田が遺著『海上の道』に収められた論考を書いていた時期はこの時期に重なっている。柳田ら民俗学者が沖縄を「南島」と呼ぶのは、それは沖縄を「内なる植民地」と見るからである。「沖縄は原日本文化の残存地域」ともはやされる反面、ベトナム戦争のための基地として、「内なる外国」とされたのである。

谷川氏は、「柳田にたいする批判の書も少なからず刊行されて」いて、「なかには、柳田の官僚性や明治の植民地政策に協力したという非難もまじっている。」しかし、「柳田のイデオロギーを批判しても、常民の世界を転向不能の地点まで下降して、柳田の開いて見せた民族の貴重な富が、それで減少することはない」（『柳田国男の民俗学』）といている。全く同感である。

さて、我々が生きる、現在の時空で、我々はどのように生き、どのように考えればよいのか。谷川氏のように、民俗学は「現世の悲哀と他界への思慕」を追及し、我々に「普遍的な、我々の祖先の経験や知恵」を示してくれる。実際、ここで取り上げた本の著者の多くが、人生に行き詰ったり、大きな岐路にぶつかったりしたときに、郷愁の思いに駆られ、故郷に戻る旅に出たのである。故郷にも、「空間的」故郷と、「時間的」故郷があるといえるのかも知れない。柳田国男の民俗学も、幼児体験に基づいているとされることがあり、谷川氏も『柳田国男の民俗学』に次のように書いている。

柳田が自分の幼児体験を一過性のものとせず、その体験を普遍化するのに生涯をかけたこと

に感銘する。それは、はるかな民族の体験は個人の感官の記憶にながくとどまるという確信に発していると思われる。

柳田は、「外国輸入の」「過去からの脱皮を目指す近代主義」の観念である「進歩」という言葉に「ふりまわされて、日本の古来からの文化を伝えてきた人々のありのままの姿を見ようとしないところに」「問題がある」として、「幸福の増進」という語に置き換えられないかと考えた。だから谷川氏はこうなのである。「民俗学が解き明かすのは、過去に人々がどのようにして幸福を求めたのか、ということでもある」（『民俗学の愉楽』）。柳田が、人間（日本人）の行き先の探求として、南島に今も残る世界観念を追跡しようとしたのは、次のような言葉で表される信念があったからである。

人は動物だが賢い動物である。考えてどこ迄も其社会を改造して行ける動物である。神を懐い死後を信じ得る動物である。そうして其以外の何者でも無い（後藤総一郎、「柳田国男研究への視覚」、『柳田国男の民俗学がわかる本』所収）。

古代日本文学の研究に民俗学や歴史学の方法を取り入れ、日本人の精神の古層を探求したことで知られる益田勝実氏の「古代人の心情」（相良亨ほか編『講座 日本思想第1巻 自然』東京大学出版会、所収）という文章の冒頭に、私たちが古代を問題にするのは、「主として臨界点に近づいた現代の文明文化の飽和状況とかかわってのことである」が、単に「時間の経過として」「古代を経てきたという理由からだけ」ではなく、「近代の行きづまりが」「近代と根源的に異なるものを求めはじめているからである」と書かれている。そして、「近代を乗り越えていく」ための「てがかり」として、「今日において、近代と根源的に対峙し、近代をゆさぶるものは、もはや古典古代ではなからう。古代のアルカイックな部分であろう」とする。

柳田の南島への興味と探求、またそのきっかけを与えた人たちや、後を継いだ人たちは、益田氏のいう「アルカイックな部分」を南島にたずねた。今、我々がそれをたずねる必要性は、益田氏の指摘を引くまでもなく明らかだと思えるが、氏はいう。「アルカイックなものは、」古代よりも前の「始原・未開の時代に大いに栄えており、」それは「習俗と深

く結びついて、「現代までも」「われわれの精神や行動のありかたの深層に潜んでいる」。

人間は、古代あるいはそれ以前から変わらず、生まれ死ぬ存在としてある。文化や文明、技術の進歩で人々の生活は大きく変わったかも知れないが、喜びや悲しみの感情は変わっていないように思われる。釈迦が説いた生老病死の四苦や八苦も変わらず克服されない。島尾ミホや石牟礼氏が豊かな感受性から「南島由来の切なさ」を察知したように、南の島に住む人々の「精神や行動のありかた」には、「アルカイックなもの」が確かに残っているのだろう。「愛し^{かな}」が「悲し」に通づるのであるから。

「過去に人々がどのように幸福を求めたのか」という探求の重要性と、その答えを南島に見出すことのできる可能性をこの拙文の要旨としたい。

私の故郷である熊本はいうまでもなく九州にあって、ヤポネシアの中では南の方に位置する島である。私には以前から何ゆえか、(九州よりも)南の方の島への憧れがあった。この文章の作成を通じて、その理由の一端に触れることができたかも知れない。日本人の幸福のために、その他界観や起源論に挑もうなどという大それた考えも力もないが、少なくとも自身の「幸福の増進」のためには、そのうち南の島へのんびりとした旅に出たいと思う。

最後に、沖縄出身の詩人山之口獺の、「一見おかしな視点から書かれているようではあっても、実は非常に素直な詩」と一人娘の山之口泉氏が表現するおかし味のある詩と、それを収めた『山之口獺詩集』(思潮社)の彼女の解説から引用して終わりにしたい。「弾を浴びた島」は次のような詩である。

島の土を踏んだとたん／ガンジューイ (お元気か) とあいさつしたところ／はいおかげさまで元気ですとか言って／島の人日本語で来たのだ／郷愁はいささか戸惑いしてしまつて／ウチナグチマディン ムル (沖縄方言までもすべて) /イクサニ サツタルバスイ (戦争でやられたのか) と言うと／島の人苦笑したのだが／沖縄語は上手ですねと来たのだ

泉氏は書く。「おかしな視点」に思えるのは、「既成の考え方」ではなく、「原点から自分で考えてしまうから」で、「子供の眼を持つ大人か、未開人の眼を持つ文明人、といったところである。」「人間その

ものの基本が単純にできてい」て、「どこにでも適応できる本能的なたくましさ」があった一方、「コアラのようにストレスを」蓄積させて、「余り長生きもできずに逝ってしまった」のは、「父が沖縄で生まれ十九の年まで育ったことと、大いに関りがありそうである。」「父の故郷では、太陽は海から現れ、海の向こうに帰って行く。」「果てしない海の向こうに夢をめぐらすことのできる美しい島に生まれた少年の輝く眼は、都会に出てもおなじ、長いことその眩しい光を失わずにいた筈である。」「父にとって沖縄は、やはり最後に帰って行ける確かな所として懐かしく存在していたに違いないのである。」

「読書」

学生図書委員会委員長
情報工学科5年

梅本雅之

私にとって、本は生活の一部だ。またその分、「読書」という言葉の意味する範囲は広い。好きなのは主に創作小説。推理ものやファンタジー、SF、歴史伝記などが好きだ。また、その広い範囲に含めるのなら漫画やラノベや雑誌とかは一番多く読み、図鑑なんかも読んでいて面白い。

現代は若者の活字離れが進んでいると言われている。しかし、現代はむしろ活字への入り口は広がっている。ドラマや映画を見てその原作小説へ。または漫画やアニメからラノベへと、活字への入り口は様々だ。

面白い映画、ドラマ、漫画、アニメを見つけたときはぜひ一度図書館へ行ってみよう。図書館では資料はもちろん新旧様々な分野の小説なんかも取り揃えているし、本のリクエストもできる。また、図書委員と一緒にブックハンティングに参加しても良いかもしれない。ジャンルなんてなんでもいいから、とりあえず自分の好きな作品の原作を読んでみる。そしたら映画やドラマとは少し違った、その作品の面白さを見つめることができるのだ。

紙とインクのか

学生図書委員会副委員長
情報通信工学科5年

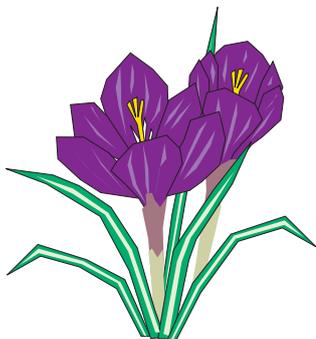
小西 遼

銀座ナンバーワンのホステスが、耳が聞こえないために通常の会話ができない人であるなんて、ちょっと信じにくい。しかし、事実、そんな女性がいる。筆談だと、会話とはまた違った楽しみ方があり、文章や言葉によって気持ちをより伝えられることもあるそうだ。

ある日の接客で、こんなこともあった。「辛い」とこぼす会社役員の「辛」というメモに、横線を一本書き足し、「幸」として「辛いのは幸せになる途中ですよ」とのメッセージを送った。男性の目からは涙がこぼれ落ちて、深刻だった表情も帰るときには笑顔になっていたという。いつもなら照れて口にするのをためらってしまうようなセリフでも、文字に書くことによってすんなり出てくる。紙とインクでしかないものが、時として何よりも自然と心に届く。

本も、会話こそ成り立たないものの、語りかけてくるという意味では共通するものがある。親や先生の言葉よりも、また友人の言葉よりも共感できることがある。

後輩たちには、工学というガチガチの理論の渦の中にいるからこそ、ステキな文章たちを吸収してほしい。それを蓄えてこそ、魅力的な人間への第一歩である。



「熊本キャンパスの図書館」

学生図書委員会委員
2年2組

宮崎 麻衣

私は、小学校の時から本を読むのが好きで、委員会を決める時もいつも図書委員に立候補していました（実際に図書委員になれたのは小中で2回だけども）。しかし、今年は本来ならば女子のクラス委員をしなければなりません。けれど、もともと積極的でない私なので、同じクラスのKさんが心配してくれて、クラス委員を交代してくれたのです。だから、私は今年図書委員として活動することができました。本当にKさんには感謝しています。

ところで、皆さんは熊本キャンパスの図書館をどう思っているのでしょうか。おそらく、小さすぎると思っている人が少なからずいると思います。私も最初は高校の図書館に憧れていたもので、正直少しがっかりしました。でも、実際に図書館を利用していくうちに、その思いは打ち消されました。なぜなら、確かに熊本キャンパスの図書館は小さいけれど、逆に言うならば読者の希望が届けられやすいということだからです。利用したことがある人は知っていると思うけれど、熊本キャンパスの図書館は本のリクエストができ、それらの希望が高確率で叶えられているのです。自分では手を出しにくいような金額の本でも、図書館に頼めば購入してくれることがあります。より多くの本に触れ合うには、図書館という環境はより優れた場所なのです。

ここで、私のお勧めの作家をご紹介します。純粋に恋愛小説を楽しみたい方にお勧めしたいのは、『いま、会いにゆきます』で有名な市川拓司さんです。奇妙な世界の中で繰り広げられるスリルと感動を、時には絶望を楽しみたい方には、『リアル鬼ごっこ』で有名な山田悠介さんをお勧めします。普通の作家に飽きた人は、昨年『1 Q84』を出したことで有名な村上春樹さんをお勧めします。独自の世界観を展開していく彼の作品は、私たちの想像を超えた世界を見せてくれることでしょう。

これを読んで興味をもってくれた人は、ぜひ熊本キャンパスの図書館にいらして下さい。

図書館で働いて良かった所

情報通信工学科 4年
山下 翔平

私は図書館で1年間働いて良かったと思っています。

理由の1つ目は、「時間を拘束されない所」です。

シフトは週に1度のペースで、平日は3時間、土曜日は5時間の勤務となります。だから、この仕事に時間を追われることはありません。そのうえ、仕事と言っても勤務中は受付をしながら、読書や勉強などをしていてもかまいません。もし、課題や試験期間とかぶっても十分こなせるので、心配は入りません。つまり、学生にはうってつけのアルバイトだと思います。

次に2つ目は、「図書館に詳しくなる所」です。

図書館に詳しくなるということは、本に詳しくなるということです。と言っても、本の中身ではなく、情報の方です。特に、私は参考書の情報には助けられました。1年間も図書館で働くと、たくさんの方が様々な参考書を借りに来たり、返しに来たりするので、気になったものはチェックするようにしていました。また、図書館のどこにどのような類の書物があるかを把握できるので、新たな良い書物を発見することもありました。学生生活において、図書館をうまく活用できれば、必ずプラスになると思います。

3つ目は、「職員の皆さんが優しい所」です。

私は、初めての勤務につく前に少しだけ不安を抱いていました。しかし、職員の方々は優しく私を迎え入れ、仕事も丁寧に教えて下さいました。また、日頃から挨拶や声をかけて頂いたりもしました。とても居心地の良い環境でした。

今度勤務する学生は、何も心配する必要はありません。楽しく働くことができますと思います。

図書館で学んだこと

電子工学科 4年
長田 大和

私が図書館受付業務を通して感じたことは、図書館という場の大切さです。図書館にはとても多くの人が毎日やって来ます。本を読みに来る人、勉強しに来る人、月刊誌を読みに来る人、おしゃべりに来る人。いろいろな目的を持った人達が、毎日図書館にやってきては各々の時間を過ごします。シーンとしたかと思えば、こしょこしょと談笑が交わされ、またシーンとなる。この空気は図書館特有で、とても居心地がよいです。だから、毎日多くの人に来るのかもしれませんが。

受付業務は、図書館を利用する人すべてと顔が合うことになります。ましてや、本の貸出しなどは会話も誕生します。私が図書館業務を行う上でよかったと思うのは、このように学校内の知らない人とも知り合うことができることです。

カウンターに座っていて、人を見かけていると、「あの人、また利用してくれている」とか、「あの人、勉強熱心だな」などと、いろいろな人の内面をのぞけるような気がします。他学年とのつながりを持つという意味で、図書館業務はとてもやってよかったと思っています。

図書館はとても居心地がいいので、休憩、読書など、みなさんどんどん活用して下さい。

図書館勤務の感想

電子工学科 4年
金子 貴博

図書館の当番は週に1回程度しかなく、また当番の日も忙しいと感じたことはほとんどなかった。こんなに楽しくお金がもらえるバイトが出来て得した気分にはなったが、今、何より得したと感じていることは、図書館の便利さを知ることができたということである。このバイトをする前は、図書館を利用することはほとんどなかったが、このバイトを始めてしばらく経つと、自分が当番じゃない日でも図書館に通うようになった。そして、本を借りる時に限

らず、ちょっとした調べ物をしたり、暇な時に本や雑誌を読んだり、テスト期間中には友達を誘って一緒に勉強したりなど、図書館には様々な利用の仕方があることを知った。

今振り返ってみても、図書館でのバイトはとても自分のためになったと思う。ただ、当番の日に図書館の様子を見ると、いつも同じ人が利用しているように感じたため、もっと多くの人に図書館の便利さを知ってもらい、利用してほしいと思う。もちろん、私はこれからも図書館を利用しようと思う。

図書館でバイトをやった

電子工学科 4年
藤 本 凜太郎

4月から図書館でバイトを始めてからもうずいぶんになる。私は部活で野球をやっていたので、1、2年のころは放課後すぐ部活に行っていたので、図書館はほとんど利用しなかった。3年になると部活もひと段落し、気がついたら図書館を利用するようになっていた。放課後勉強をしたり、本を借りる頻度が増えた。そして3年のとき、バイトの話があって応募したらくじ引きで当たって、今バイトをやっている。私はよく図書館を利用していたので、いつもどおり図書館で勉強するだけでお金を貰えるというのは夢のような話だった。バイトを始めてすぐは5時から8時までの3時間、とても長く感じた。正直、3時間つづけては勉強できない。でも、だんだん慣れてきて勉強する時間もだんだん増えるようになった。基本的にずっと一人なので、ときどき友達がきてくれたときは本当にうれしかった。それと私が思うに、図書館には一人で来ることが望ましい。バイトをしていると数人で勉強しにきている学生をよく見かけるが、しゃべってばかりで勉強しない。最後に、図書館を上手く使いこなせば学校生活をよりよいものにできると思うから、是非多くの人に図書館に足を運んでほしい。

図書館受付の感想

電子制御工学科 4年
一 郷 華 穂

私は、2009年度の1年間、図書館の受付という仕事をさせてもらいました。この仕事をする中で、沢山の本を読むことができ、受付に来た人と少しでも関わることで、自分自身の成長にもつながりました。また、図書館の事務の方たちとお話することで、その中から学ぶことも多くありました。これからも図書館を有効に利用していこうと思います。そして、来年から始める人たちもこの図書館受付を通して、何か役に立つことを身につけてもらえれば、と思っています。

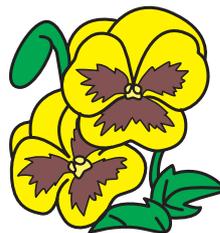
図書館業務を通して

情報工学科 4年
三 池 伽 奈

私が図書館の受付のバイトをして良かったことは、本を読む機会が増えたことです。情報棟からは図書館が遠いため、3年生以降はなかなか図書館に行くことが少なく、あまり本を借りる機会がありませんでした。

しかし、4年生になり図書館のバイトとして図書館に通うことになったので、今まで以上に本を読む機会が多くなり、とても有意義な時間を過ごすことができました。

これからも積極的に図書館を利用していきたいと思っています。



第31回 校内読書感想文コンクール!

本年度の校内読書感想文・作文コンクールを行い、下記の作品が入賞となりました。
来年度も校内コンクールを実施予定です。たくさんの応募をお待ちしております。



選考結果及び作品紹介

読書感想文

区分	作品名	学年組	氏名
最優秀作	「銀河鉄道の夜」	2年1組	水間海帆
優秀作	「ひかり」	1年1組	久世美聡
優秀作	人間失格の判子を自分で押した彼に小さな幸せを。	1年2組	森田綾子
佳作	「沈黙」について	1年1組	廣瀬信之
佳作	「納棺夫日記を読んで」	1年1組	渡辺龍二
佳作	「人間失格を読んで」	1年2組	坂口大成
佳作	「納棺夫日記を読んで」	1年3組	北村聖美
佳作	『もの食う人びと』	1年4組	山田理園
佳作	疾走	2年1組	橋本美香
佳作	『最後の授業』	2年2組	高山なつ樹
佳作	桜が創った「日本」	2年2組	田口景織子
佳作	心は機械で作れるか	2年2組	吉川 慧
佳作	羅生門	2年3組	中村勇介
佳作	ベートーベンの生涯	2年4組	田中智典



「銀河鉄道の夜」

2年1組 水間海帆

私はずっと「本当の幸せ」を探している。私にとっての本当の幸せは、自分だけでなく、皆が幸せになることだと思っていた。だが私の今までの人生において、そんな事はありません。私が幸せをつかもうとする事によって、誰かが犠牲になってしまう。とても傲慢な考えだとわかっていたが、いっそ自分とひきかえに、その誰かの幸せを守りたいと思うこともあった。そのくせに、心の奥底には、自分が幸せになればそれでいい、自分の幸せの為ならば他人を蹴落とすこともいとわない自分がある。他人の幸せを守る自分と、自分の幸せを守る自分。二つの間で私は揺れていた。「本当の幸せ」なんて存在しない、ただの理想なのかもしれない。そんな時、手にとったのがこの本だ。私はこの本を読んで、美しいと感じた。夜空に輝く銀河、そこに流れる、水素よりすきとおったあやしい水。そして、銀河鉄道に乗っている人々の心は、銀河の中でもひととき美しい。その美しさの根底にあるのは、「本当の幸せ」をもたらしたいという切なる願いだ。しかしそれだけではない。そこには、一本の哀しみの糸が通っているのである。私はそこにひきつけられた。その糸をたぐりよせたら、そこには何があるのか。それが見たくて、私はもう一度ページをめくった。

貧しく孤独な少年ジョバンニは、星祭りの夜、親友のカムパネルラと共に銀河鉄道に乗り、銀河を旅する。その途中、二人は幼い姉弟とその家庭教師の青年に出会う。彼らは、船が氷山にぶつかって沈み、他の小さい人達を助けて自分達は船に残り、水に落ちて汽車にきた。青年は、「ただいばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」と言う。また、夜空を照らす蝸は、「まことみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。」と言った。そしてカムパネルラは、級友を助けるために水に飛びこんで死んでしまったのだ。彼らは、自らの命を犠牲にして、他の命を守ろうとしたのだ。私は、これらの行為をととても貴いことだ

と思う。彼らは、「本当の幸せ」を信じて、そのために行動したのだ。私は、「本当の幸せ」を信じてはいても、それに向かって行動することができるかわからない。それが正しい行為だとは言い切れない。だが、自分の信じる道を進んだ彼らは美しく、貴い存在だと感じた。

姉弟達と別れた後、ジョバンニとカムパネルラはまた二人きりになる。そこで二人は、どこまでも「本当の幸せ」を探しに行く約束する。しかしカムパネルラは突然いなくなってしまう、ジョバンニは現実の世界で、カムパネルラが級友を助けて水に飛びこんだことを知らされる。ジョバンニは「本当の幸せ」を探すために生きることを選び、カムパネルラは「本当の幸せ」のために死んだ。二人の選択は正反対であるが、どちらも同じ「本当の幸せ」を追求する中でのものである。二人は、それぞれが一番正しいと思うことをしたのだ。これから先、「本当の幸せ」を探す選択をしなければならぬときが来るかもしれない。そのときは、どちらにせよ、自分が一番正しいと思う選択をしたい。それが直接「本当の幸せ」に通じているわけではないと思う。しかし、「本当の幸せ」につづく道の過程の一つであると思う。

この物語には、絶えず哀しみの糸が流れている。主人公のジョバンニの、貧困と孤独の陰には、環境的なものからくる存在自体を嫌悪する苦悩などがある。それは深い哀しみと諦めとなって、物語全体に横たわっている。その哀しみは、人間の存在に深く根ざしているものだ。だから私はこんなにもひきつけられたのだろう。ジョバンニはその哀しみを認めて、「本当の幸せ」を探すために夢と訣別し、現実世界を生きる決心をするのだ。

この本を読んで、私は「本当の幸せ」について深く考えさせられた。「本当の幸せ」は、理想なのかもしれない。でもそれでいい。理想を抱えて、理想を信じることの素晴らしさをこの本は教えてくれた。私の中にも哀しみはある。おそらく一生それを抱えて生きていくのだろう。それと戦い苦しむことは、「本当の幸せ」につながるかもしれない。私は自分の信じる道を進み、「本当の幸せ」を見つけたいと心から願う。

「世界がぜんたい幸福でないうちは、個人の幸福はありえない。」(宮沢賢治)



著者は納棺夫になったことで劣等感に悩まされていた。

しかし、父を亡くした女性の、涙を溜めた驚きの目の奥に見た何かが、全てを解決した。

死をタブー視する社会通念を変えるため、自分の心を変えた。自分に自信を持ち、納棺夫に徹した。

すると、今まで死というものと常に向かい合っていないながら、死から目をそらしていたことに気づいた。

死者の顔を気にしながら、死者と毎日接しているうちに、死者の顔のほとんどが安らかな顔をしているのに気づいた。

著者の中で、死への恐怖、嫌悪感がなくなった。そして、著者は日記に記した。

「人は死に照らされて生が輝いて見えてくるなどと言うが、ほんとうは死を受け入れることで、生死を超えた光に照射されて生が輝いて見えてくるのだ」

この言葉は、著者がどこからか抜粋したものである。これが、著者の心に響いたように、私の心にも響いた。

私は今まで、祖父と祖母、三人の家族を失った。

私がまだ幼い頃、ICUに入っていた祖父は毎日、私の名前を紙に書いていたそうだ。大好きな祖父に会いたかった。しかし、私はICUに入ることができなかった。

私はいつも、病院の廊下で一人、父や母が出て来るのを待っていた。

祖父が亡くなって、棺に入った祖父の顔を見るのが怖かった。その事実を受け入れられないまま、私は少しずつ棺に近寄った。そこにいた祖父は、まるで眠っているようだった。

その後、私はもう一人の祖父、祖母を亡くした。

棺の中に入った三人の顔は安らかな顔だった。きれいな姿のままだった。

三人は戦争も経験している。そして、幼い頃に大切な家族を亡くしている。

私の知らないところで、祖父や祖母は、辛く苦しい思いをたくさんしてきたはずだ。しかし、私が見た最後の姿からは、その苦労を全く感じさせなかった。本当に幸せそうで、穏やかな姿だった。

三人を亡くし、今でも心の奥で、いつか帰ってくるかもしれない、とかすかに思うことがある。

人はこの世に生を受ければ、必ず死に直面する。言葉では理解している。だが、私は死から目をそらしている。

父や母の死、友人の死、自分の死、考えるだけで胸が苦しくなる。

この本を読んで、嫌いなもの、怖いもの、忌み嫌うものを避け、死を恐れる自分の醜悪さを知った。

ここでは、様々な「ひかり」が現れている。

捕まるまいと必死に逃げ、生きようとする蛆。死を覚悟した人が見た景色。それは、スーパーへ来る買物客、走りまわる子ども達、犬、垂れはじめた稲穂、すべての生命が一瞬一瞬を必死に生きている姿から感じた「ひかり」である。

また、著者は「死に近づいて、死を真正面から見つめていると、あらゆるものが光って見えてくるようになるのだろうか」と著わしている。

私は、ここに出てくる「ひかり」のように、生命が発する「ひかり」を感じたいと思った。

全ての生命は尊い。だが、生きるためには、他の生命が犠牲になる。私は生かされて生きていることを忘れないでいたい。そして、死と向き合い、一瞬一瞬を大切に生きたい。私の生命の「ひかり」を大切にしていきたい。心から、そう思うことができた。

読み終わった後、中学時代の担任の先生から聞いた言葉を思い出した。

「あなたが生まれたとき、みんなは笑っていたでしょう。だから、あなたが死んだときは、みんなが泣くような、そういう人生を送りなさい。」

祖父や祖母が亡くなった時も、周りの人は泣いていた。

私も、自分自身の死に直面したとき、幸せで、安らかな気持ちでいたい。そして、父や母、友人、大切な人も、そうであってほしい。

「人間の生とは、死と一つなのであった。死のない生はなく、生と無縁な死もない。」

この本から学んだことは、私にとって一生の宝物である。

自分にとって不都合な事から目をそらしていた私が、心を変え、そして、行動を変えていく気持ちになれた。

「生」と「死」を考えること。それは、人間の儚い生命の「ひかり」を絶やさず、後世継ぐため、私達に課せられた問題なのだと感じた。



「死にたい」

と彼女は常に呟く。特に不平不満がある訳ではない。その重すぎる言葉をまるで歌でも歌っているかの如く軽やかに言い放つのだ。彼女は特に劣るところのない、極めて一般的な人間だった。何をそんなに嘆く必要があるのか、と言われてもおかしくない普通の幸せを持っている人間だった。そんな彼女が毎日を嘆くところを見るのは、あまり良い気持ちがしない。

そんな時に、私は太宰治の人間失格を読んだ。作者である太宰氏の遺書の様な文書を。

それを読み終わった時、私は口が達者な小学生の言い訳を聞かされた様な気分になった。結局私の中では、彼も彼女も同じ分類に分けられたのだった。そんな大層不幸な人生を送っている訳ではない、所謂“普通”のレベルで毎日を嘆く彼等は似ている。

そこそこの幸せとそこそこの不幸を嘆くのは、もっと辛い人生を送っている人達に失礼ではないか、と彼等の様な者を見るといつも思ってしまう。戦争で幼い頃から両親が居ない、手足がない、目が見えない、耳が聞こえない。世界中にはそんな人達が沢山居る。五体満足で生まれ、家族に囲まれてぬくぬくと育てられて、不満を嘆きそこから抜け出そうとするというのはなんと視野が狭い奴だ、とも。

だがそう思えるのは、私が戦争経験者ではないからだ。実際の不幸な人達、というのはその不幸の中に幸せを見出している。一見不幸に見えても、本人達は満たされていたりするものだ。常時地獄の鍋で茹でられているからこそ、氷が貰えるだけでとても

幸せな気持ちになる。ぬるま湯すら足先で弄んでいるだけの日本の現代人は、アイスクリームやかき氷が貰えても大した幸せとは思わないだろう。だから実際私達が目を見た不幸な者は、あまり自分の環境を嘆いたりしない。

嘆くのは、自分に構ってほしい者やありふれた幸せを幸せと思えなくなったぬるま湯を弄ぶ現代っ子位だろう。

太宰氏は前者ではなかろうかと、私は勝手に思っている。道化を演じ周りの者にサービスをする。人間不信で他人が理解出来ない恐怖を和らげる為、取り敢えず他人を笑わせておけば良い。自分を害のある者として見られないようにすれば良い。それらが道化を演じる理由だと本文では書いてあったが、彼も気付かない心の根の奥深くでは、構って欲しい、自分を捨てないで欲しいという思いもあったのではなかろうか。

それでも、その心の奥までも読み取ってもらえぬ辛さ、他人を騙している様な感覚が常に付き纏うのが積み重なって、張り詰めた糸がプツンと切れてしまったのではないかと思う。先程私が太宰氏は普通の生活を送っているのに毎日を嘆くのは不幸な者に失礼だと書いたことに対して、何を言う、太宰は充分不幸ではないか、と思う者も居るだろう。だが思い出して欲しい。彼は自分を追い詰める余り奇行に走ったり、更に自分を追い詰めたりする様になったのだ。つまり最初の「構って欲しい・捨てないで欲しい」から始まった苦悩で自分をどんどん追い詰め、自分から地獄の沼へと足を突っ込んでしまったのである。

この様なことを書いていると、私が自ら太宰氏とは相容れなさそうだと書いている様に思われるかもしれないが、実は違う。私と彼の性格は酷似していると言っても良い程だ。実際私は道化を演じたりもするし、極度の人間不信で表面上笑っていても本心では全てを拒否していたりする。性格が酷似しているからこそ、自分と同じ考えの者が自殺したという事実が気に入らないのかもしれない。性格や考え等は小説を読んで汲み取っただけなので、本当に私と彼の性格が酷似しているかは分からない訳だが。それでも、少し似通ったところがあるのは変わらないだろう。

構ってもらいたい等から始まる苦悩は、現代の人

にも多く見られる。前述した私の友達のように直ぐ「死にたい」という言葉を軽々しく使う人があまりにも多い。そして、実際に“それ”を行ってしまう者のなんと多いことか。

その人達も先程挙げた、2種類の間で、本当に重症な者ではない。私は、その生活の中の本当の幸せを見出せない者の自殺が許せない。

どこにでも散らばっている小さな幸せを素直に受け取れず不幸を嘆き自殺してしまう者はどうかと思う。まだ先が長い者も多いのに、態々それを自分で縮めたりするのは勿体無い。何よりも、彼等の周りに待つ者が居るのだ。そのことも忘れないで欲しい。

彼等には、普段の生活に存在している小さな幸せを見つけて、人生を前向きに生きてもらいたい。



私が、この遠藤周作の「沈黙」を読んだ理由は、宗教に対して前々から疑問などがあったからだ。それは、なぜ宗教が長い年月の間無くならず人間に歴史に関わってきたのか。色々な宗教に信徒がこんなにいるのか。宗教は、皇帝や王が人々の支配に使うほどに、人々を統制する力を持っていたのか。人々は、宗教の何に魅了されてきたのか。私は、宗教に対し様々な疑問を感じていた。この本、「沈黙」の舞台は、日本の江戸時代初期、将軍徳川家光の頃で、島原の乱後、鎖国が始まりキリスト教徒への迫害が激化発化した時代。この物語は、キリスト教を迫害した側、迫害されてもキリスト教を信仰した側両方のそれぞれの立場の人が出てきて、そして、この物語の主人公、ポルトガル宣教師セバスチャン・ロドリゴがそれらの人々を見て、キリスト教や神などについて考えるところに、私の様々な疑問の答えがあるのではないかと思ひこの本を読んでみた。

この本の中で印象に残った出来事や、言葉が、私の抱いていた疑問の答えや、ヒントになると思ひ幾つかあげてみた。

一つ目は、この本の中に出てくる踏絵という行為

だ。踏絵は、幕府の禁教政策の一つで、キリストや聖母マリアの絵を人々に踏ませ、踏むか、踏まないかでキリスト教徒かを調べるものだ。見つかったキリスト教徒は拷問にあう。この本でも、その拷問の辛さがでており、主人公の宣教師ロドリゴでさえ、「踏んでもいい、踏んでもいい」と言ったほどだ。なのに、なぜ絵を踏まないのか。キリスト教徒だから、キリストや聖母マリアの絵は踏めないのか。私は、この考え方はおかしいと思う。なぜなら、キリスト教徒が慕っているのは、キリストや聖母マリア本人であり、キリストや聖母マリアの絵ではない。絵を信仰しているわけではない。それに、キリストなら人が苦しまなくて済むなら、絵を踏んでいいと言っただろう。これらのことから、私は、宗教を信仰するのに人々は偶像や、絵に頼り信仰すべき本当のものを見失っているように見える。見た目に囚われているだけでは、それは、本当の宗教とは呼べないものだ。

二つ目は、主人公ロドリゴの心中の言葉で「あなたはなぜ黙っているのです。この時でさえ黙っているのですか。」というところだ。あなたというのは神のことで、これは、キリスト教徒が拷問にあっているのを見たロドリゴが神に対し嘆いた言葉である。これが、本の題名にもなっている「沈黙」、神の沈黙である。神の沈黙をロドリゴが考える場面は多くあり、一番この本で考えさせられることだ。最初は、ロドリゴにとって小さな疑問だったが、それがだんだん大きくなり、なぜ、神が沈黙し続けるのかという苛立ちになった。最後は神が本当に存在するのかという考えにまで発展した。神が沈黙しているのは、神がいないからではない。神はいる。だが、神が人間を簡単に助けるとだれが言ったか。それは、我々人間が思い描いているものでしかない。それに、人間は何かあると神様と言う、そんな人間には助けはない。神に、助けを求めず人生を生き抜いたものに神の救済はあると思う。人間として人生を生き抜くことが神から我々に対する試練ではないか。それに、神は人間が生きている間は、何も示さない。我々が、人生を生き抜き死んだ後に我々に道を示し助ける、これこそが神の救済であると思う。

三つ目は、主人公ロドリゴが踏絵を踏んだ後に心中の台詞で「聖職者たちはこの冒涇の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼等を裏切ってもあの人を

裏切ってはいない。今までとはもっと違った形であの人を愛している。」という部分だ。あの人とは、イエス・キリストのことである。これは、踏絵を踏んだことに対する言い訳に聞こえるが、私は全く違うと思う。これは、踏絵を踏んだことの言い訳でなく、他人からの教えや、規則から解放され自分の考えで宗教を信じ、神を信仰する、自分で道を開いていくことを表しているのではないか。他人からの教えだけを聞くのではなく、人から何を言われても自分を信じ、自分の信仰を信じる、それが宗教で一番大切なことである。

人間は弱い生き物なので、色々な道具を使い、神を信仰している。だが、その道具は人間が作ったもので、それを祈っても、それは、神ではない。あと、今の宗教の規則が宗教のすべてではない。これも、人間が作ったものだからだ。神は、人間の手に届かない存在、それを象った道具や、神の名を語り規則作るなど、傲慢なことだ。規則や、道具を使わなくても、神を信じ、自分を信じ、自分の信じた道を歩むことが本当の宗教ではないか。そのようなものを神は見守り道を示す。一番大切なのは目に見えているものではない、人間一人一人が持っている心だと思う。



「死ぬ」とは何か、そして「生きる」とは何か。私はこの作品を読んでそのことを深く考えることとなった。

『納棺夫日記』では筆者が納棺の仕事を通して感じた死ぬことや生きることについてのあらゆることが語られている。死体の身なりを整え、棺に納める、そういった仕事をするとすることは、あらゆる人の死に様を見ることであり、そういったことを考えるのはごく自然なことだと思う。

その中で語られていたことの一つにあらゆる時代、あらゆる社会によって変わってゆく「生」や「死」への価値観があった。戦争に明け暮れた時代や大飢

饉や疫病が蔓延した時代では死を軽視する傾向にあった。時には過去の日本のように死ぬことこそが美しいというような考え方もあった。それに対して医療技術が進み、戦争が少なくなったことで死を身近なものに感じるものが減った今の時代では、死ぬことは悪だという傾向にある。

私は後者の時代に生きる人間で、死に対する考え方もそちらよりだ。死ぬことは怖いし、身近な人間が死ぬことは悲しい。これは私だけかもしれないが、他人の死はイメージできるが、自分が死ぬというのがうまくイメージ出来ない。なぜなら人間は自らの目や耳などの五感で自分のいる「世界」を認識しているからだ。自分というフィルターを通さないと「世界」を認識することが出来ないわけだから、自分がない世界というのがイメージ出来ないのだ。

私たちは死ぬことを恐れ、悪とみなし、生きること执着する。そのために教育で死ぬことは悪だと教え、医療で死を徹底的にとおざけようとする。しかし死はどんな人間にも遅かれ早かれ訪れるわけで、そういった死への恐怖からの行動が、死をより苦しいものになっている、とも筆者は語っている。

病院のベッドで「一生懸命に生きろ」、「がんばれ」とプレッシャーをかけられたり、自らが望まないにも関わらず、医者や親族の意思で植物状態同然で生かされたりするのはあまりに辛いことだと私も筆者に共感する。死ぬことを怖がるなというつもりはないし、そんなことは生物として不可能だろう。しかし生きることが絶対なのだと思信するのは危険だと思った。

人々の心に巣食う死への恐怖、これをどう無くす、とまでいかななくても軽くするためにはどうすればいいのか。難しい問題だと思うが、この問題に対して筆者は一つの答えを出している。

それは「命の光」を見ることだ。筆者はその光を、まもなく病気で亡くなる叔父に会ったときや、孤独死した老人の近くにいた蛆を見たとき、多くの卵を孕んだトンボを見たときにその光を見たという。その光は太陽の光でも電球の光でもなくて、理性では理解できず、実体験以外に理解する方法のない光なのだそう。この光を見た人は生への执着や死への恐怖がなくなり、安らかで清らかで全てを許せるような心になるのだそう。この光について、筆者は親鸞や宮沢賢治などのいろいろな人が残した言葉を

用いて考えを深めている。

この光について、筆者があらゆる点から語っているのを読み、私はこの光について信じてもいいのではないかと思った。それほど説得力を私は感じた。しかし科学を万能だとは思わないが、ある程度理論的にこの光について語られていなければ、鵜呑みにするのはどうかとも思った。しかしもし本当にこの光が存在するのならば、純粹に見てみたいものだと思った。

少し話はそれてしまうが、先述した通り私は人は自分を通してあらゆることを認識していると思っている。つまり人は自分から逃れることは出来ない。本当の意味での客観視というのは不可能なのだ。この本では生死を超えた、自分の肉体を超えた世界というのが語られている。そんな世界に行けるなら、根拠はないが、そんな自分から逃れ、本当の意味での客観視が出来るのではないかと思った。

この作品には筆者が納棺の仕事をきっかけに辿り着いた生と死の境地が語られている。

私はこの作品を読んで感銘を受けたのは確かだが、本を読むだけでは分からない、頭で理解しただけでは分からない、もっと本質的で、実際に体験しないと本当に理解したとはいえないようなこともこの本には語られている。まだ生まれて十五年ほどしかたっていない、経験不足な私では到底理解できないようなことがこの本には語られている。この本をもっと私が年をとってからもう一度読みたいと思う。あらゆることを経験し、死ぬことの意味、生きることの意味をもっと長い時間考え抜いた末に、この本を読んだとき、この本の本当の重さが、理解できるのではないかと思っている。



私は最初にこの本の冒頭を読んだとき、妙な気持ちを感じた。それは、作者自身が自分のことであろうものを薄気味悪いだの、怪談じみた気味悪いものが感ぜられるだの、けなし、罵っていたからである。

それに、私自身がこのような冒頭の書き方を見たことがない、ということも理由の内の一つかもしれない。何れにせよ、私はこの話の主人公に対し「変わった人」いわば「変人」というイメージを持った。

少年のころの主人公、大庭葉蔵は常に不安を抱えて生きていた。その不安とは、自分だけ他人と違って見えているような不安だったと思う。私はとても驚いた。只の少年がこんな深い考えを持つことが出来るのか、と思ったからだ。常人では出来ない、私はそう思った。少なくとも私は子供のころそんな考えを持ったことはないだろう。そして葉蔵は「道化」を極めた。逃げ込んだ、と言ってしまってもいいのかもしれない。彼は、人間を恐れていたが思い切ることはできなかった。それ故に、何とかしてでも人間と係わりを持つため、繋ぐために彼は「道化」を考え出したのだと思う。又は、人間として生きていくために。しかし、彼は生きる気力さえ失ってしまうことがあった。そのたびに彼は幾度となく自殺をこころみた。しかし、いつも死にきれず、助かっていた。助かった後にはいつも、「人間」との係わりがあった。このときほど「人間」の温みを感じることはないと思う。そして、結局彼を支えたのは「人間」であった。このとき彼が他人を恐れずに、信用していたか、していなかったか、は私にはわかるはずもない。しかし、彼は少なからずや「人間」を信用していた、出来ていたのではないか、と思う。何故ならば、彼は自殺するときには必ずと断言しているほど二人で自殺をはかっていた。つまり、その相手を信頼しているからこそできた行為ではないのか、と考えたためだ。しかし、その信頼でさえも真であると言い切ることはできない。

そして、彼は「世間」、「人間」、「生活」とは何か、という問いを自分の中で出した。しかし、彼は自分と他人との壁が見えてしまい、他人の集合体である「世間」、「生活」、他人や自分自身である「人間」は当然わからなかった。私自身「世間」、「人間」、「生活」とは何か、と問われたとしても、たとえ一生をかけてもその答えを導き出すことはできないだろう。何故なら、私は「人間」ほど複雑でわかりにくいものはない、と考えているからだ。だから、私は他人や自分、つまり「人間」を簡単に理解したことは一度もない。それは、他人にとっても同じことであると思っている。しかし、私たちは生きていくために、

わかっていない「生活」をしなければならないし、わかっていない「世間」を渡っていかなければならない。そしてその結果、その「生活」や「世間」の道徳や習慣に知らず知らずのうちにひたってしまうのではないだろうか。そして「生活」や「世間」というものがあいまいになってしまうだろう。しかし、彼はいつまでも恐怖や「生活」、「世間」への、そのあいまいなままの順応と闘っていたのではないだろうか。あいまいなままの順応とはいわば、その仕組みに染まってしまうことを意味している。「生活」や「世間」とはわかりにくいものであるために多くの人はそこを避けて通る。そして、あいまいなままになってしまう。しかし、彼は違った。彼はそこを避けて通らずに、わからない、という姿勢を崩さず、つらぬき通してあいまいさをなくしたのではないだろうか。

私がこの本を初めて手に取って読もうと思ったとき、内容はとても惨たらしく、暗いものだろうとばかり思っていた。しかし、実際読んでみるとそうでもなく、人間の生き方に考えさせられたり、他人のことをどう思い係わっていくか、ということなどを考えさせられた。そして、この本の内容は一生忘れることはないだろうとさえ思った。つまり、私にとってこの本はそれほど示唆に豊んでいるような気がしたのだ。

彼は常に自分を厳しく批評していた。また、「……神さまみたいないい子でした。」これは彼の知人であるバーのマダムが彼のことを言った言葉である。一方、彼は「人間、失格」と自分に対し言った。もし、マダムの言葉の意味がそのままの意味であればここからも彼の自分への評価の厳しさをうかがい知ることができる。

彼は自分のことを「狂人」、「発人」と呼び最後には「人間、失格」と言った。ここで私は一つの疑問を持った。それは、どのような人間は「合格」なのかというものだ。私はこの問いに対する答えを出してみたいと思った。しかし、それはとても難しいことだと思う。でも、私は何かを考えること自体に意義があると思っているので、それはそれでよしとしておきたい。



私がこの『納棺夫日記』を読んで一番心に残った事柄は、著者である青木さんの叔父が癌で亡くなった場面だ。

私の叔母（母の姉）も同じように、癌が原因で入院して亡くなった。しかし、病室で面会した時の叔母は、両親に聞いたより元気そうで、笑顔も浮かべていたので、幼い私はそれほど心配することでもないので、安心しきっていた。

しばらくすると、突然叔母が亡くなった。私の目には元気に映っていたので、戸惑い、信じられなかった。家族で葬式に行き、私は泣いている母に手をひかれて参加した。

その当時の私は、死んだ人間とは二度と会えないことは理解していたが、“死”というものがよく解らなかった。そして解らないなりに、死者に対して泣くことは、精一杯生きた死者に対する冒瀆である。等という考えを持っており、母に、泣いちゃダメ、と言っていたこと、困ったように泣く母を覚えている。

遺骨を骨壺に納める作業も行った。綺麗に横たわった人間の全身の骨を見ていると、まるで作り物を見ている気がしてきて、怖くはなかった。ただ、真っ白い骨が発する、肌に触れる熱気だけが、これは現実だ、と言っている気がしてならなかった。そして従姉とともに、遺骨を骨壺に入れ終わると、頭蓋骨辺りの骨を砕き、何処の骨を骨壺に入れるのか説明を受ける祖父が視界に入り、頭蓋骨はどれも同じ頭蓋骨なのに、何故選んでいるのか疑問に思った。今思うと、頭蓋骨に近いどこかの骨だったのかもしれないが、結局謎のままだ。

その頃から私には、“死”は穢らわしいものとして映らなかった。それは、棺が花に埋め尽くされていたから、幼い私にはそう見えたのかもしれない。けれど、私は、死は一種の旅立ちとして捉えていたと思う。私は動物が好きで、家は小さな動物王国だった。犬を筆頭に、鶏、金魚、ウサギ、ハムス

ターと、いろいろな動物を飼った。そして、死ぬときまって泣いた。どんなに小さな生き物が死んでも大泣きしていたのだが、いつしか泣かなくなった。悲しみが少しでも紛れるようにと、一緒に過ごした彼ら、死んだモノに対して泣くことは、その時間を冒涇しているのではないか、という考え方を編み出したからだった。

こうして私の体験を振り返ると、作中で著者が述べていたように、私は死に向き合っているのか不安に感じた。詳しく言えば、当時は向き合えるような経験が無かった。しかし今はその経験が十分にある筈だが、しっかりとくる答えを出せた自信がないのだ。

それから、他の親族は皆健在で、私が経験した葬式は今のところ一度きりだ。したがって、テレビや新聞など間接的にではなく、本当に死を目の当たりにしたのもそれきりなのだ。もう、10年近くなる。だが、叔母の死に顔は、今も鮮明に私の記憶に刻みこまれている。幼かった故に、私の心には“死”という疑問とともに強く印象に残ったのだ。それから私は、度々“死”について考えるようになった。

幼いころには「二度と会えなくなる」程度の考えだった“死”は、考察を重ねるごとに、理解するどころか、更に不可解なものへと変わっていった。死とは何か。その答えを見つけようとするのなら、真っ先に宗教などの教えにたどり着く。が、それぞれの主張は違う。家の宗派も知らない私はどれを信じればいいのかも分からず、また、抽象的なことばかりをつらつらと綴っている難しい教えに、匙を投げた。

しかし、『納棺夫日記』を読み返すうちに考えは変わった。死後のことなど、生きている人間には分かりもしない。同じように、死そのものも分かりはしないのだ。一度しか死を見ていない私に、死と向き合い、死を受け入れられるようになった、死を見続けてきた著者の言葉が胸を打った。

死と対峙し、死と徹底的に戦い、最後に生と死が和解するその瞬間に、不思議な光を見た。その著者の言葉に、思った。私は、死と対峙することも、死と戦うことも、生と死が和解することもしなかった。だから、著者の言う光も見つけることが出来なかった。私は、本当の意味で死と向き合えていなかった。幼かったとは言え、叔母の死に向き合えな

かったことに後悔した。あの母の涙は、自分の姉の死に向き合う上での辛さだったのだろうと思うと、申し訳なくなった。

死、というのは、理解できるものではなく、受け入れるものなのだと思う。死に向き合い続けて境地に達したのだとしても、そのすべてを理解することは出来ない。私たちにできることは、死を受け入れることだ。目をそらさず、真正面から見て、受け入れる。それがこの本を読んで学んだ、死と向き合うということだ。



「有り得ない……。」

辺見庸さんが書かれた『もの食う人びと』を読み終わり、私が最初に発した言葉である。しかし、この本に書かれているのは辺見さんが実際に体験したことばかり。つまり事実なのである。私はそう気づき、思わず息を呑んだ。そして、何も言うことができず、思わず目を瞑った。

私はこの本を読んで色々なことを思い、考えさせられた。その中で一番心に残ったことと、初めて知ったことがある。

私が一番心に残ったことは、バングラデシュの首都であるダッカで、残飯を食べて生きている人がいることだ。残飯を食べているのは、主にスラムの住人である。彼等は富者が出した食べ残しである残飯を食べて、細々と命を繋いでいる。そのことに、私は驚くと同時にとても悲しくなった。日本では捨てられ、処理されるはずの残飯。それがスラムでは、生きるための唯一の食事なのだ。スラムが多くある発展途上国ではよく見かける光景かもしれない。しかし、戦後からぐんぐんと経済が成長し、先進国の仲間入りとなった日本では、あまり見かけないのだ。空腹ならば、満たすために何かを食べるという当たり前。常に食料が保存されている、豊かな冷蔵庫。一日三食の食事。そんなものと共に生きてきた私は、彼らと私たちの間にある気の遠くなるような食の差

に、瞬きを忘れて驚くことしかできないのだ。なぜなら、私の当たり前を世界は拒否するからである。そしてこの前、私は当たり前のように、大量の残飯を出した。その日のメニューはカレーで、家族の分も作ったためニンジンやジャガイモなどの皮をたくさん捨てた。また、私は全て食べてしまうことができず、カレーを残してしまった。その時の私は、食べ物を残すということに何の罪悪感も感じていなかったのだ。私はいつものように残飯の山を積み上げていった。今思うと、私は先進国と発展途上国の食の差を、また広げてしまったのだ。自分のしたことを恥じた。自分のしたことを後悔した。明日を生きるために、私の残した少量のカレーを食べたいと思っている人たちがいるかもしれない。私はその人たちの気持ちを踏み潰したのだ。私の体の奥から、モヤモヤとした罪悪感が顔を出し始める。私は、大罪を犯したような気分になった。今、日本は飽食である。私は、この飽食が未来永劫、永久に続いてほしいと思う。しかし、世界はいつ変化するかわからない。日本の飽食が、音をたてて崩れ、人々が残飯を求める時代が来るのだろうか。そんな地獄を想像すると、私の眉間にはしわが寄り、心臓が締め付けられたように、少し苦しくなった気がした。油断は……できない。

次に、私が初めて知ったことは、日本兵がフィリピンのインタバス村のキタンラド山というところで、人を食べたことだ。残留日本兵たちは、フィリピン兵の攻撃を逃れ、キタンラド山に登着した。そして、日本兵等はインタバス村の住人を、山の奥に連れて行き、食べたのだろう。私はそのことを初めて知ったとき、脳内が真っ白になり、胃の中から目には見えない何かが見え上げてくるような、感覚に陥った。「どんな味だったのか」や「食後の感想」など、興味が浮かび上がる前に私の脳は考えることを止め、停止した。「人が人を食べた」という現実を受け入れることができなかった。本を読むスピードが遅くなる。ゆっくりと動き出した私の脳では「何故食べた？」という疑問がグルグルと回った。しかし答えは簡単で、日本兵等も私も誰もがこう答えるだろう。「生きたいから」と。人間はいずれ訪れる「死」を拒みながら生きていると思う。「生きたい」という強い思いが日本兵等を、突き動かしたのではないか。生きるためだからと言って、人殺しをするのは良く

ない。しかし、生き残るためなのだからしょうがないだろう。この二つの意見が、私の中で葛藤している。平和ボケした私の脳では、どちらが正しいかなんて決めることができない。普段、私たちが喜々として行っている、「食べる」という行為。それが、人の考えや常識を180度変えてしまうことに、とても悲しくなった。「生きるために食べる」という考えは、時に残酷である。あの時、私の胃の中から込み上げてきた、目には見えない何か。それは「食べる」という行為に対して、初めて恐怖を抱き、縮こまった私の胃の叫びなのかもしれない。

この本を読んで、私は今まで気付かなかった、「食べる」という行為の別の一面を発見できた。また、食に対する気持ちも一段と濃くなった。私たち日本や先進国は、これからすべきことがたくさんあるだろう。まずは、国民の食の無頓着さを恥じ、発展途上国の食事情に驚くべきだ。そして同じ「生きる」という目的を持った人間同士、助け合うべきだろう。私は、この世界に一つでも多くの笑顔が咲くことを願い、生きていきたい。



「どうして、人間は死ぬの？」

答えは人それぞれだろう。誰だって一度は考えた事がある、しかしはっきりとした答えが見つからない疑問だろう。シュウジは「どうして？」というさまざまな疑問を大人にぶつける子どもだった。幼い子どもは目にするものすべて、耳にするものすべてが新鮮で、疑問を持ってしまう。

両親の答えにも納得しなかったシュウジであったが、兄であるシュウイチの答えには納得した。シュウジを納得させた兄、シュウイチは世間で言う『できる子』であった。何をやらせても要領がよく、何を言わせるにも隙がない4つ年上の兄。シュウジはきっと、彼に一目おく一方で、何でもできる兄に少なくとも劣等感を抱いていたのではないかだと思った。

物語の初めには、どこにでもいるような家族の姿が描かれている。しかし、途中で一変するのだ。

成績優秀で周囲の期待もひとしおだった兄シュウイチの様子がおかしくなったのだ。きっと「俺がやらなければいけない」というプレッシャーに耐えられなくなったのだろう。カンニングを見つけたことを境にシュウイチは壊れていく。ひきこもりから始まり、幻覚症状、シュウジへの暴力、そしてついには連続放火までしてしまう。私は、時に人の期待とは、凶器にすらなりうると思う。「頑張ってるね」、「期待しているからね」という言葉に答えようと思うのは誰しも当然のことだろう。しかし、頑張りすぎもよくないのだ。シュウイチはバランスがくずれてしまったのだと思う。『赤犬』と呼ばれるようになったシュウイチ。彼の気持ちも分かるような気がする。

そんな出来事から、シュウジの家族は変わってしまった。家の中から笑いが消えてしまったのだ。暴力を振るうシュウイチに怯え、気を使う毎日。家族の絆さえも壊れてしまった一家に何が残るのだろうか。

この本にはところどころで、漢字を使わないひらがな表記の部分がある。それによって思いがより伝わってくるような気がする。例えば、作中に出てくる宮原雄二の言葉。4人を殺した彼の独房での言葉がひらがなでかかれることによって、暗く、狂ったように感じられる。

シュウジは走ることを好きだ。作中にも多く走るシーンが取り入れられている。最後まで走り続けた。可能性があったのに諦めざるを得なかったシュウジはかわいそうだ。

『誰か一緒に生きてください』という言葉が一番心に残っている。エリがシャッターに『私を殺してください』というメッセージを書いたのを見てシュウジはこう書いたのだ。辛いことを背負い、ひとりでいたシュウジとエリ、それぞれの心の叫びがにじみ出ている気がした。

私はこの物語を読んで、おもしろいと感じたことがある。普通の物語は、作者やわたしたち読者から見た目線で全て名前を表記してある。しかし、この物語では、シュウジではなく『おまえ』と書かれている。シュウジを知っている誰かの視点で書かれているのだ。誰かが見た、シュウジの生き様になって

いる。特に物語の最後は、亡くなったシュウジに語りかけているような独特な終わりになっている。思わず涙が出てきた。

シュウジはかわいそうな男の子だ。暴力を振るわれ、家族はバラバラになり、自らも人を殺してしまう。しかし同時に、心の優しい少年だったのではないかと思った。どちらも人を守るための人殺しだったのだ。人を殺めることはこの世界で最も凶悪で、してはならないことである。

私たちは愛する人が目の前で苦しんでいる姿を見て耐えられるだろうか？ そう考えさせられる本だと思った。

『人生は双六盤-。』そう神父さんは語っている。両親は心中し、一人残されたエリは不幸ばかりの双六盤の上において、そして不幸に遭うマスに止まる目を出しているということになるのだ。それは公平なのだと言ふ神父さんは言う。難しい話で理解しがたいと感じた。

作中で『孤立』『孤独』『孤高』の違いについて書かれていたのが、とても納得した。孤高というのは強いのだ。ひとりでも胸を張って、生きていられる。しかしそれは寂しいと感じられた。

この物語を読み、人間はひとりで生きていく事は出来ないと改めて考えさせられた。どんなに強くても、協力を得なければ超えられない壁もあるのだ。ひとりではできないことだって、多くの人が集まって力をあわせればきっとできる。それだけ人間はすごい力を持っている。その力が間違っただけの方へと行ってしまわないことを私は強く願う。



アメリカの大学で教授だったラウディ・パウシュは当時46歳で3人の子供がいた。そんな中、癌による余命宣告を受け彼に残された時間はあとわずか。彼の家族、そして彼に関わったすべての人たちへの精一杯のメッセージを込めた教授としての『最後の授業』を行った。

私は、彼に感銘を受けた。

そんな彼の言葉の中でも心に残った点が3つある。

一つ目は、具体的であることを重視した点だ。ランディは子供のころ、夢をいくつか紙に書いた。その内容はとても具体的だった。結果的に彼はそのリストに載っていた夢のほとんどを実現させ、実現できなかった夢からも大切なことをたくさん学んだと語っている。夢を具体的に思い描くことで、自分のすべきことが明確になりさらにはその夢の方から自分に寄ってきてくれると彼は言う。

この点について私は、夢を思い描くことの大切さを学び、自分にはそれが無縁だったと実感した。今の私に、大きな夢はないと言ってもいい。ただぼんやりと自分の中で思い描いているものはあるが、それも漠然としている。あと数年経てばまた気持ちが変わり、決断しなければいけないときまで決断はしない、とどこかで思っているに違いない。ランディのように、幼いころのインスピレーションがそのまま夢に結びつく場合もあるだろう。そのインスピレーションが比較的具体的であったから夢も具体的だったのかもしれない。私もインスピレーションというものはとても重要なものだと思う。私の場合、まだそれに会っていないのかもしれない、そう考えることにした。となると、やはりこれからが楽しみだ。

二つ目の点は、彼が楽観的であり続けたことだ。

これが一番考えさせられた点だ。

人生は、考え次第でどちらにも転ぶ。同じ癌でも、絶望し残りの人生を悲観的に生きるのか、ランディのように「死ぬときをあらかじめ知ることができてよかった」と楽観的に生きるのかではまったく充実感というものが違ってくるだろう。さらに、後者はそれほど難しくもないかもしれないとも思う。私だって、心臓麻痺や交通事故でいきなり死ぬよりは、たとえ癌になったとしても、寿命をあらかじめ知らされたことを幸運に思うかもしれない。

彼の楽観的な人柄が一番良く表れたのはやはりこの場面だと思うが、そうでないときも彼は物事を前向きに捉えることを忘れなかった。

私はいつもたくさんの物事を同時に考える癖がある。これは昔からだ。そのせいで、たまに考えすぎて疲れる。これを友人に相談したところ「考えるのがいやになったら考えるのをやめればいい」と言わ

れた。一見簡単そうだが、私にはできなかった発想だ。小さなことで長い間考え込んだりするのは、時間の無駄かもしれないとそのとき思った。それから、ひとつひとつのことをより軽く、前向きに考えてみた。そうすると、どんどん内から楽観的になっているのがわかった。友人には感謝している。そしてこの本で、ランディは友人と似たようなことを言っていたのだ。いかに人生においてそれが大事か痛感した。

最後に三つ目。それは、彼が感謝の気持ちを忘れなかったことだ。

彼は特に家族、それから自分の夢の実現に関わったすべての人に終始感謝の気持ちを持っていた。

人は必ずしも一人では生きられない。彼を見ているとそれを再確認できる。

この「感謝する」という言葉にこれほど惹かれた理由は、私の恩師である剣道の先生方から耳にタコができるほど聞かされていたからだ。「技術よりも先に、お前たちが今不自由なく剣道の稽古ができることに感謝しろ」といつも言って聞かされた。親に送迎してもらうことだってそうだし、防具があることだってそうだ。先生方も、時間を割いて稽古をつけて下さっている。あげればきりが無いほど、周りに支えられていることに気づいた。

感謝の気持ちを忘れたら、私はそこで終わりだと思う。人は人に支えてもらっているし、自分もまた、思っている以上に人々の支えになっていると思うのだ。感謝の気持ちを言葉にして「ありがとう」と言うだけで、人との距離はぐっと縮まる。

彼が文章中繰り返していたことで、さらに彼の言葉の中で一番印象深かった言葉がある。それは、「レンガの壁があるのは、僕の行く手を阻むためではない。その向こうにあるものを自分がどれだけ真剣に望んでいるか気づかせるためのチャンスを与えているのだ。」という言葉だ。何かの途中で壁にぶつかったら、チャンスだと考えなければいけない。いつでも、少しくらいの壁は想定内にしておかなければならない。そういうことだろう。

彼と、彼の本からは、多くを学んだ。彼の生き方は本当に素晴らしかった。決まり文句のようだが、私も人に自慢できるような悔いの無い人生にしたい。



春休み、私の学校の中庭にはたくさんの桜が咲く。下から見上げるとピンク色の花弁は私たちの視界を塞ぐように青空を彩っている。そんな「桜」について述べてある本、『桜が創った「日本」』。私はこの本から将来技術者になるために必要であろう3つのことを学んだ。

1つ目は「記憶の継承」についてだ。今日本列島を覆う桜のうち8割はソメイヨシノという桜である。私たちが映画やドラマで見るとような桜並木に植えてある桜などが大体そうだ。私たちは花見に行くと、たくさんの満開の桜の下で食事するのが一般的だ。しかも桜の満開の時期は10日ほどしかない。しかし、江戸時代の花見は違う。開花時期の違う多様な桜を1箇所を集め、それぞれの桜の違いを愛でていたらしい。期間も長く、2ヶ月ほどあったらしい。どうして今と昔でここまで文化が違うのかというと、これにはソメイヨシノが大きく関わっているからだ。ソメイヨシノは明治に入ってから流行した桜で、それまでの桜と違い成長が早く、一重の花はとても一輪一輪が大きい。しかも日本のどこの風土でもしっかりと根を張ることができる。鑑賞用にももちろん、建物の見栄えをよくするためにも使用された。接木や挿木で増やすためコストもかからなかったらしい。またソメイヨシノは他の桜と比べ寿命が70年程と短い。この70年という単位がおよそ人の一生と重なることから、個人がその木に自分の想いや歴史を刻むのに丁度いい年数だ。一方、他のヤマザクラやエドヒガンになると寿命は数百年にまでのぼる。これは村の一生と同じくらいの年数である。この年数になると当然、人々が世代を交替しながらこの桜の世話をしなくてはならない。そこで必要になるのが「記憶の継承」だ。先人の記憶を自分のものとして引き継ぎ、また自分の記憶も含め次世代へと引き継いでもらう。これは技術の進歩においても必要なことだと言える。もしこの記憶の継承がなかったら、私たちは先人の記憶したものを発見し、自分で記憶する

ことから始めなければならない。今の早い技術の進歩についていくには、それでは駄目だろう。

2つ目は視点についてだ。私たちは日頃、何かと物事を分類する。例えば人工と自然だ。私たちは人工に属し、またこの人工と自然の境を作っているのも人工だ。私たちは常に人工からの目線で自然との調和を考える。しかし桜にはこういった区別はない。たとえ花粉を運ぶのが風でも虫でも人でも桜にとって大した差はない。人工でも人工でもなくてもどちらでもいいのだ。桜はどちらの目線でもなく、全体を見渡していると言ってもいいだろう。何もかもを区別するのではなく全てを受け入れ、必要なものを選んでいく力も必要だと思った。本文中にあった言葉、『外からの影響を受けずに何か創りだされることはない』。まさに言葉通りだと思った。

3つ目は言葉自体の意味についてだ。一言に「桜」と言っても、桜自体年々変化が起きている。先程の花見の話であったように日本に分布する桜の種類比率が変化すれば、新しい品種もでる。そうやって桜自体の環境が変われば、周囲の環境も変わる。すると人間から見る桜のイメージも変化するだろう。そのような本文中ではこうまとめられている。『「桜」の変化が人間の「桜」イメージを変え、それがさらに「桜」を変えたわけで、「桜」は自分自身を創りだしている』。この桜の部分には科学技術や自分など、なんでも当てはめることができる。そのものの存在を私たちは言葉で表現しているが、その言葉の内容は刻一刻と変化しているのだ。昨日の自分と今日の自分は違う。それは一日に少し髪が伸びたり、授業を受け新しい知識を手に入れるからだ。これからも日々自分を変化させ、いい方向へと新しい自分を創りだしたいと思った。

以上の3つが、この本で学んだことだ。今日本は百年に一度の大不況の中苦しんでいる。将来社会に出て何かしら行動がすぐにとれる人間になるためにもここで学んだ3つのことを重点において頑張りたかった。幅広い分野での知識を持った技術者となるためにもこれから広い視野を持てるよう心がけ、日々自身の向上に努めたい。桜が日本を創るように、自分も日本を創れる人材となれるよう、日々努力したい。



心は機械で作れるか

2年2組 吉川 慧

私は最近、ある疑問を抱き始めた。それは、このまま情報化が進んだら人々の考えや常識が変わるのではないかという疑問である。インターネットで調べ物をしたりしていた頃はまだそんなに考えていなかったが、自分でプログラミングやそういったことを論じた本を読んでいくにつれて、だんだんと疑問がわいてきた。人工知能（AI）もそのひとつである。

産業技術総合研究所が人間に近い外観と動作性能を備えたロボットの開発に成功し、また、ある研究によるとスーパーコンピュータがそのまま成長し続けると人間の脳神経のシミュレーションが十分に可能になるという報告がなされている。一昔前まではフィクションの世界で語られていたことが、だんだんと現実味を帯びてきている。

しかし、このようなニュースを聞くと私は期待とともに疑念を抱いてしまう。果たしてこのような技術は本当に人々に幸福をもたらし、明るい未来を実現させるのだろうか。むしろ、それまでであった価値観が変わり、人々が争いや犯罪を巻き起こし、惨禍を起こしかねないかもしれない。

このような意見に対して、それはあまりにも悲観的ではないかという意見もあるかもしれない。実際、私はあまり積極的に考えることができず、消極的に物事を捉えがちである。が、手放しに技術を礼賛するのも問題である。

人工知能の問題に対しても、研究者や哲学者の間では賛否両論がある。人工知能を再現するには、常識的な事柄の真偽関係をひたすらコンピュータに入力していけば良いのではないかという意見もあり、真偽関係を覚えていても、適切な判断をしなければだめではないかという意見もある。前者の具体例はアメリカの企業が行ったCycプロジェクトというもので、一般常識をデータベース化し、人間と同等の推論を行わせようとするものである。

一方後者の立場からは、こういった実験に対して

批判もある。アメリカの哲学者であるヒューバート・ドレイバス氏は「コンピュータには何ができないか」という本を書き、批判を加えた。彼は「常識的な知識は『膨大な量の命題的知識』として表象することができない」という見解を示している。

ここで、「表象」という言葉が出てきた。私は、哲学や情報工学に関する知識はまだ未熟であり、大変この本を読むのに苦しんだ。哲学や心理学が絡んでいるので、人工知能に関する問題はかなり難解である。また、人工知能は心に関する事柄も含んでいるのでさらに複雑になる。

私は専門的なことに関して言及するのは無理だが、人工知能やインターネットなどの情報技術に対する希望は語ることが出来る。私が最初あたりで述べた意見の「インターネットやコンピュータは人間にとって悪い影響を与えるかもしれない」と言う意見と矛盾しているかもしれないが、私は情報化社会に対してアンビバレントな感情を抱いている。期待もしているし、危惧もしているということである。

それを踏まえて私が情報技術に最も期待することは行いたい処理を簡単にできることである。一般的コンピュータに命令するには、アプリケーションを起動し、ボタンを押すなどの作業をしなければならない。もし、自分が行いたい作業を行うアプリケーションがなかったらどうだろう。コンピュータを使っている殆どの人はC言語やVisual Basicなどのプログラミング言語を用いて自分の行いたい作業を行うプログラムを書くことはできないので、かなり困ることだろう。しかし、普段から話している言葉で、コンピュータに命令を下すことができれば、行いたい作業を行うことができる。じっさい、日本語でプログラミングすることを実現するプログラミング言語もあるが、文体が不自然でまだまだである。しかも、日本語はあいまいな表現が多く、こう言った命令をすることに対して向いていない。そうならば、誰もが使うことのできるような簡単なプログラミング言語やIDE（統合開発環境）が必要だ。最近ではpythonやrubyなどの簡単なスクリプト系の言語が出てきてそれに近づきつつある。しかし、まだまだプログラミング言語を使いこなせる人の数も少なく、敷居も低くない。万人がプログラミング言語を習得するというのは困難に近いので、技術者や高い技術を持つ人が一般の人の要求に答え、良質なアプ

リケーションを開発すべきだ。

しかしこういった理想を持った人もいれば、自分の私欲を満たすために法律に触れるような事柄に技術を使う人もいる。こういった人が増えたら、まさに私の危惧していることが現実になる。このような事態を防ぐにはやはり倫理観が無ければならない。今は技術に倫理観が追いついていないように見える。医療の現場で起こる不祥事やインターネットの犯罪などからそれが見られる。技術を見につけることは技術に精通する人にとって絶対条件だが、こういった倫理観があるかないかが今後の情報化社会の帰趨を占うであろう。



どうして『羅生門』に登場する下人は、暇を出されただけなのに、飢え死にをするか、さもなければ盗人になるのか、極端な選択で迷ったりしていたんだろうか、と単純な疑問が浮上した。次の働き口を見つけるという別の選択肢が存在するのではないかと考えた。

しかし、その考えが浅はかな物だと気付き、すぐに考え直した。その下人は、新しい仕事、働き口を探し出す以前に、お金を持っていなかったのだ。また、飢饉や地震等の天災による不況により、新しい仕事を探すことも困難だった。寝るところと食事を与えられるだけの生活をしてきた下人は、ろくな給金はもらっていなかったかもしれない。暇を出されたときも着ていた物のまま放り出されたに違いない。それゆえに、一文無しののだ。だから、仕事を見つけ出す前に飢え死にしてしまう。『食べる』と『盗む』が彼にとっては等価だったのだろう。自分の中の正義が働き、悪人になりきれない彼だからこそ、悩んでいたのだ。自分の正義を取るか、自分の命を取るかそれこそが極端な選択であり、究極の選択だ。私にはそう思えてならなかった。

京都の町は荒れ果て、羅生門はいつからか、引き取り手のいない死体の置き場になっていた。ここで

ひとつ確認しなければならないことがある。舞台となる『羅城門』は京都の表玄関である。京都は風水の思想に基づいて設計された都市だ。そんな羅城門の楼の内には幾体もの死体が置き去りにされている。そこにあるものは、人間のいうよりもむしろ生き物の残骸と表現した方がふさわしいのかもしれない。そういった所からも、京都が荒れていたことがわかる。そこで下人は檜皮色の着物を着ている老婆と出会う。檜皮色の着物は、元からその色ではなかったはずだ。死体の血が染みついてそのような色になってしまったのだろうか。老婆の垢が染みついて変色してしまったのだろうか。いずれにしても老婆の荒んだ生活を象徴している色として描き出されている。檜皮色の着物は、『蜜柑』で描写されている鮮やかな色彩表現とは対極である。老婆は放置された死体から、髪の毛を抜いている。死者に対してこのような行為をしている老婆を下人は問いつめる。盗人になるのをとどまらせている良心からだった。『この女は蛇を干し魚と偽って売った。だが生きるための術なのでしかたがない。だからわたしのしていることも、この女は大目にみてくれるだろう』というのが老婆の理屈だった。肉食が禁止されていた当時、蛇の肉を食わせたのは大罪だったのかもしれない。ゲテモノである蛇の肉を偽って売ったこと、食べてはいけない肉を食べさせたのは、よほど道義に反した行為だったのだろう。この話を聞いた下人の良心は堰を切ったようにある方向へ向う事になる。文中では『勇氣』と表現されているが、『勇氣』とは生きることへの選択である。『お前がしているようにしなければ、俺が飢え死にになってしまう』と、檜皮色の着物を盗み取ってしまう。この瞬間から、下人は人間としてではなく、生物としての生存を選択することとなるのだ。生物は、生きるためにはどんな無様なことをしてでも生き延びる努力をする。地球の環境が変わると、形態をも変えてしまう。隕石の衝突で地上が灼熱地獄となれば、姿を変えて地下へ、深海へと避難する。そして、何千年の間そのときが来るのを待ち続ける。私達の祖先である小型のほ乳類も、惨めに逃げ回りながらもそのときを待って生きてきた。だから私達が存在するのだ。生きるというのは私達が考えている以上に、グロテスクで懸命なものなのかもしれない。後天的に身についた『盗みはしてはいけない』という常識がどれだけの

重みを持つのだろうか。生物として生きるか死ぬか
と選択を迫られたとしたならば、私は答えることが
できない。『下人の行方は誰も知らない』で、『羅生
門』は終わる。もしこの一文が、『下人は役人に捕
まり、強盗の廉で処刑された』や、『盗人である自
分の中にいまだ存在する良心と葛藤しながらも、下
人は最後には善人になった』では、これほどまでに
生きるということはどういうことなのかと私は考えた
だろうか。何とも言えない憂鬱な余韻が残っただ
ろうか。芥川龍之介は35歳で自殺する。命と引き替
えに書き続けたのかもしれない。生きる本能をも凌
駕してしまう芥川龍之介の創作活動のすさまじさに
鳥肌が立つような気がする。命の代償のひとつが
『羅生門』最後の一文であるように思えてならない。
さらに、本来『羅城門』である所を『羅生門』とし
ていることから、命について深く考えていたことも
想像される。『羅生門』という作品は、『生』そして
『死』について考えさせられる。人間は弱い生き物
で、卑怯な生物である。そういう部分を悟った芥川
龍之介だからこそ、自ら命を断ったのかもしれない。



この本を読んで、私の中のルートヴィヒ・ヴァ
ン・ベートーベンのイメージががらりと変わった。
私のイメージしていたベートーベンはいつもしか
めっ面で、怒り狂い、騒がしいというものだった。
しかし実際は、幼少時父親の強制的なレッスンや酒
癖の悪さ、晩年は難聴などの身体的な障害もあり、
普段はとても憂鬱な表情で荒々しい目を閉じ、片隅
でパイプをふかしていたという。だが、ピアノに向
かっている彼の頭の中に突如作曲の発想が生まれた
ときや、急な靈感の発作のときは憂鬱な表情が一変
し、顔面の筋肉が緊張し盛り上がり、血管は膨れ、
荒々しい目は倍も恐ろしくなり、まるで「リア王」
のようだとユーリウス・ベネディクトはいったとい
う。

ベートーベンの幼少のころは周りから「楽聖」、

「神童」などと呼ばれていたが、それはすぐに終わ
り、モーツァルトのように温かい家庭のある、輝か
しいものではなかった。逆に酒癖の悪い父親のせい
で、金儲けのために無理やり音楽をさせられていた。
父親の暴力により強制された地獄のようなものだ
った。このことから、私はベートーベンが憂鬱にな
ったのがわかった気がする。しかし、このことにより、
音楽の実力が高まったのも事実だと私は考える。ま
た、ベートーベンの母親は彼が17歳の時に肺結核で
亡くなっており、彼自身もそのときすでに健康につ
いて絶え間なく悩んでおり、自分も肺結核をわず
らっていると思ひ込み、さらに憂鬱症になり、それ
のほう病気の中でどれよりも重かった。しかし彼
は母親が死んだことにより、一家の主として家計を
支えなくてはならなくなった。酒飲みの父親を隠居
させ、2人の弟の面倒もすべてベートーベン自身が
みた。このことは彼にとってとても恥づかしいこと
で、心に深い傷を作ってしまった。このように彼が
幼少時とても暗く、隠逸な暮らしをしていたと思う
と私は、心の底から尊敬の念が込みあがってきた。

一家の主となってから暗いことばかりではなかつ
た。彼にとっていい出会いがあった。生涯、かわら
ぬ真情を持ち続けてくれる、ブロイニングの家庭と
の出会いだった。これは彼にとって、とても貴重な
出会いだと私は思う。また、この家庭の、彼より2
歳年下の善良でやさしい、エレオノーレには、彼が
ピアノを教え、彼女は彼を詩の理解へ導いた。エレ
オノーレは後にベートーベンの生涯の友である
ヴェーゲラーに嫁ぐが、3人の愛情が失われること
はなく、私は変わらぬ愛情を持ち続けたこの3人は
本当に固い絆で結ばれていたのだと思った。

私は小さい頃からピアノを習っており、ベート
ーベンの曲に多く触れてきた。この本を読んだこと
で、彼の曲に対する思い入れや、理解、情熱、感情、思
いなどが深く伝わってきて、より一層演奏に厚み
が出て音色が変わったように思える。普段からよくク
ラシック CD を聴くのだが、そのときの聴く姿勢や、
集中の仕方も大きく変わったように思える。この本
にも出てくる「月光」や「悲愴」、「テンペスト」は私
も演奏経験がありどれも1年をかけて完成させた。
しかしこれを読んでから改めて演奏すると、私に欠
如しているものが見えてきた。曲に対する理解不足
や、それが誰に贈られた曲かをしることで、曲のイ

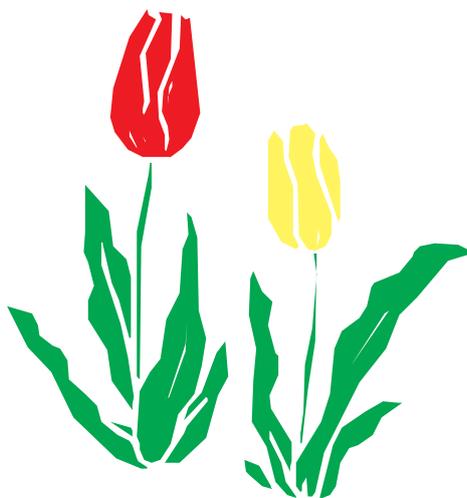
メージというものがよりはっきりしたものになったからである。

先述したが彼は難聴だった。それにより作曲においてもものすごい苦勞をした。耳が聞こえない中で自らが作曲した交響曲の指揮を執ったり、作曲活動をしていたのだから、ベートーベンという人物は本当に音楽に関しては天才なのだと思う。

難聴や彼の持病により、人間関係はあまりよくなかった。難聴の初期のころは彼が誰にも言っていなかったために、挨拶などを無視していると勘違いされものすごい悪態を吐かれていた。晩年は、親しい仲のものとはノートと筆記具を用いて筆談をしていたようだ。彼は遺書に自分の病状を医師に詳しく書かせるように指示し、人間関係の改善を図ろうとし

ていた。このことから、非常に繊細なんだと感じた。

ベートーベンという人物は生涯不幸だった。彼には幸福という言葉が似合わないように思える。事実彼は、波乱万丈で紆余曲折な人生を送った。ピアノの先生にもあまり恵まれず、天才過ぎたがために周りの理解が得られないなど、彼の周りには苦勞が多かった。しかし、古典派とロマン派の橋渡しの重要な存在だし、名曲も数多く残している。この本を読んだことで、彼に対する尊敬の念や憧れが強まり、彼の音楽が私はより好きになった。私もベートーベンのように、生涯をかけて音楽、ピアノにのめりこんでいきたいと思う。彼のように大きな壁をいくつも越えて、熟成された音色が出せるようになりたい。



第55回

青少年読書感想文全国コンクール 熊本県審査入賞者!

第55回青少年読書感想文コンクール熊本県審査において、校内読書感想文コンクールで入賞した3名を応募し、全員が入賞を果たしました。

表彰式は、平成21年12月24日（木）に校長室で行われました。

記

優秀賞…2年1組	水間 海帆	「銀河鉄道の夜」を読んで
入 選…1年1組	久世 美聡	「ひかり」
入 選…1年2組	森田 綾子	人間失格の判子を自分で押した 彼に小さな幸せを。



『受賞の言葉』

優秀賞受賞者 水間 海帆さん

このたびは、優秀賞という素晴らしい賞をいただけることを非常に嬉しく思います。現実の人間は美しいばかりとは限りません。誰も心に美しい部分と醜い部分を持っています。しかし、自分の心の醜い部分を知っているからこそ、この物語はいつそう輝きを増し、また強く心をひかれるのだと思います。

私は、この物語に大きな影響を受けました。その時感じた衝激が、成長の糧になれば幸いです。評価していただき心から感謝します。

高専再編にともなう特別寄稿

さらばモールス船 (回想記)

特科8期・第2別科2期 宮 都 政 一

消滅したモールス符号。かつては唯一の遠隔通信手段であった無線通信。その通信士の育成も学校の歴史の一齣と、モールス船(回想記)の筆を執りました。

昭和23年(1948)春、太平洋戦争が終結して2年余り、まだ戦災の跡が随所に残っていましたが、日常の生活では何となく落ち着きが見え始めたこの時期、熊本無線電信講習所・特科生入試の募集があり、受験資格は新制中学校卒(15・16歳)以上、軍隊の経験者を含め21歳までの年齢であったように記憶しております。

4月上旬、合格者約100名が特科8期生として、青雲の志を抱き講習所の門を叩いたものでした。入所生の殆どが九州各県から、遠くは静岡・高知両県からの学友も相当数おり、大多数の生徒は寮生活に入りました。

校舎は旧陸軍の2階建ての兵舎2棟、その内の1棟の1階が特科生の教室で、その2階が寮でした。屋外には、寮生専用の屋根付きの小部屋ふうの炊事場がありましたが、換気窓なしのため煙にむせび、目を赤くしながらの炊飯でした。

全国的に食糧難の時代であり、食材の入手に苦労しながら、それぞれが寮食の不足分を満たしました。今思えば、この自炊は寮生達の活力の源となり、大いに青春を謳歌したものです。(以降、熊本無線電信講習所より熊本電波高専までの校名を「本校」とします。)

当初、本校の所管は逓信省(現・総務省)でした。本校で1ケ年の所定の科程を終了すれば、卒業時には無線通信士の免許証が授与されるとの事、また入試案内にもこのような内容が記されていたと思います。

同年8月1日、本校の所管が逓信省から文部省(現・文部科学省)へ移管され、新電波法が施行となり、今後の免許証の交付については、国家試験の受験・合格によってとなりました。この話を生徒達

が耳にしたのが年末で、卒業までの日数の少なさで大きな衝撃を受けました。国家試験の受験は未経験であり、一抹の不安を感じながら勉強にも専念しました。試験の結果は見事に全生徒が合格し、第3級無線通信士の免許証の取得ができました。

卒業後の進路は、進学(第2別科2期への進学組は、特科8期卒が私を含めて11名で、卒業生は13名でした)。就職は陸士希望者は少なく、海上希望が殆どで、下関・福岡・長崎の各漁港を基地とする水産会社でした。これらの会社は東支那海・黄海へ出漁する漁船(100トン前後の漁船で以西底引き船と言う)を所有する大洋漁業・日本水産ほか中小の会社でしたが、ほぼ希望する会社へ就職できたようでした。

当時の日本は、まだ連合軍の占領下であり、東支那海・黄海へ出漁する漁船は、マッカーサー指令により「毎日の正午位置報告」が義務づけられました。この位置報告の必要から、100トン以下の底引き船も無線機器の設置が急務となり、水産会社への就職の門戸は広がったようでした(昭和25年11月19日付で位置報告規則の施行により、マッカーサー指令は廃止になりました)。

片や一方、商船隊は戦争により、開戦前の4分の1と言う大損害を受けました。政府は日本の経済の復興は、商船隊の復活が緊急かつ不可欠の問題として、昭和22年、政府資金による計画造船に基づき、内航貨物船から着手しました(当時は外航船の建造は禁止でした)。

また当時は内航・外航共に運航可能な船舶も少なく、上級免許者のトロール船(500トンの大型漁船)または底引き船にも乗船しておりました。昭和24年、占領政策緩和の一環として、外航船の建造禁止が解除され内航船・外航船の計画造船は、昭和27年まで進みました。これら船舶の竣工により上級免許者は、次々と内航・外航船へ移って行きました。

私は、昭和25年(1950)4月、下関の水産会社に就職しました。会社には本校の特科3期卒の先輩が

いて、漁況通信・船内居住の注意点等の指導を受けました。また他社でも特1・7期卒の先輩が活躍中でした。

東支那海・黄海の漁場は、高級魚、漁獲量ともに多く、日本及び中国漁船には好漁場でした。6月25日、朝鮮戦争が勃発し、開戦後のある日の事です。多数の日本漁船が「×××(緊急符号)」の送信に続き「我、逃走中・・・」と打電しながら、時間が経過するにつれ信号は途絶えました。拿捕されたのです。これ以降も拿捕事件は続き、更に状況は悪くなりました。

それは、昭和27年(1952)、韓国大統領が一方的に「李承晩ライン」を設定し、これまで以上に拿捕事件が頻発。日本漁船が多く釜山港に係留されました。日本政府は直ちに、対策本部(北九州市)を設置し、この拿捕事件の防止策として、巡視船による韓国警備艇を常時監視し、その情報は無線で日本漁船に周知されました。また追跡されている漁船と警備艇の間に割り込み、追跡を断念させる等の捨身の活躍に、業界関係者は深く感謝しました。当時の巡視船には、通信担当官として本校の本科生及び私の同期生が勤務しておりました。

長期間にわたり拿捕事件は群発していましたが、昭和40年(1965)、日韓漁業協定が成立すると共に、「李ライン」は撤廃となり、釜山港に係留中の船員及び船体は、同時に帰国となりました。この他、中国漁船(200トンの巾着船)による日本漁船の拿捕事件も起こっていましたが、日中漁業協定の締結で、海洋資源を保護する規則の他、諸規定により、台風接近時の避難港として上海・連雲港へ緊急入港が許可される等、東支那海・黄海は平和な漁場にかえりました。

ここで漁船通信士の実務及び仕組みを記します。先ず以西底引き漁業の基地は、下関・戸畑・福岡・長崎の各漁港にあって、各基地には約80から100隻近くの漁船がおり、この大多数の漁船の通信を円滑に運用するため、各基地は所属する漁船等を5～6グループに分割しました。1グループの1日の運用時間は、0600～2200まで、この時間帯の中で船間(漁船対漁船)及び陸船間(陸上局対漁船)の通信時間を決めます。各グループの通信時間は、運用時間帯内を4～5回に分け、1回の通信時間は30分位

でしたが、船数に応じた時間を割り当てました。

通信の方法は、グループ内の1隻を通信全般の指揮権を持つ「当番船」として選出し、当番船は、船間通信時間になれば、各漁船の漁況通信(暗号化)を順序よく受信し、引き続き各漁船の会社あて電報をまとめて受信します。以上の受信を終了した当番船は、次に、先に受信した漁況通信(1回限り)を全放送します。この放送は、漁船が漁況通信を、受信もれした分を補填するために行いました。

また陸船間の通信は、陸上局から漁船あて電報を、代わって当番船が会社あて電報を相互に送受信し、以上で船間及び陸船間通信の1回が終了します。以降、この方式による通信を3～4回行い、当日の当番船の職務は終了しますが、他に気象・市況の受信もありました。

一方、漁船側もこの陸船間の時間帯を傍受しており、電報が自局あての時は受信しておき、次の通信時間に受信済証(QSL)の送信で、当番船の負担を軽くしました。

昭和30年(1955)代に入り、レーダー・超短波無線電話・ロラン等が設置され、また「ロラン-C」の開局により、船位決定が簡便になりました。その一因に、博多漁船通信士会(当時の会長は特科8期卒)が、ロラン測定値を「簡単な海図」に記入する事で、船位決定ができる「操業図」なる海図に似たものを、会員及び特科卒業生の尽力で作成しました。併し、日本の海図等の刊行は、海上保安庁・水路部にあつて「私製のロラン操業図の使用を禁ずる」旨の通達がありました。しかし、業界からも操業図の至便さを強く申し入れた結果、水路部は「漁獲用の使用にのみ認める」との回答により使用可能となりました。

話は変わりますが、船員手帳の職名変更について、昭和35年(1960)頃から、通信士の乗船が1名の場合「通信士から通信長」に変更されました。船舶局の無線設備の操作は、無線従事者免許証及び海技免状(国土交通省交付)の所持が必要になりました。当時、初の海技免状の取得は、特にわれら官立無線電信講習所の卒業生には、書類審査のみで海技免状が授与されたと記憶しております。

昭和60年(1985)代に入り、長年月に亘る乱獲、

電波機器の発達により漁獲の涸渇化が危ぶまれ、航海日数の延長、市況の低迷もあり、就労船員が減少し始め、廃業する中小の水産会社も出てきました。

底引き業界が、このマイナス環境に陥り始めた時、GMDSSの導入問題が始まり、業界の将来を勘案のうえ、第3級無線通信士を第2級無線通信士へ昇格のための講習会が開催されたようでした。

GMDSS導入は、猶予期間が設けられましたが、逐次に設備され始め、沿岸自動船舶電話、インマルサット M 等の利用で、何れの海域からの通信も、常時使用が可能になりました。漁船のGMDSSの設置が進むと共に、モールス通信の利用は薄れ、陸上の漁業無線局は閉局、モールス通信は消滅しました。

商船の無線通信は、遭難通信・緊急通信・安全通信の他、航行警報・気象通報・港務通信・公衆電報（事業用及び私用を含む）・受信契約した新聞放送等の運用は、モールス通信で行いました。

これら商船の通信の運用には、通信士の資格及び員数は、電波法、船舶職員法、船舶安全法等により、無線局の種別ごとに定められています。資格は1級・2級の免許所持者で、運用時間が24時間の場合は3名、16時間は2名、8時間は1名となっていました。

船舶局の運用時間中、遭難通信を受信した時は直ちに船長へ報告し、遭難船と宰領局（遭難局と直接交信する局）との通信が、円滑に実施されているか、否かを確認し、自船がこの通信の介入に必要なければ、他の周波数によって通信ができます。

また運用時間中、電信船（500kc）、電話船（2182kc）の周波数を、毎時間の15分及び45分からの各3分間（沈黙時間と言う）を聴取し、何の信号も入感がない場合、無線業務日誌に（N-L）と記載します。執務時間以外は、自動緊急受信機を作動させ、緊急信号を受信した場合は、通信長室のベルが鳴るようにしています。緊急・安全通信の送信は、沈黙時間の終了後、これらの通信を表す前置符号の送信後、他の周波数で送信します。

昭和56年（1981）5月1日より、電信船も電話船の遭難周波数（2182kc）の聴取、また近距離通信用のVHF電話の普及により、全船舶は、国際VHF呼出周波数（156.8MHz）の聴取が義務化された事により、電話による遭難周波数は全船舶の共有波と

なり、如何なる船舶間でも通信ができる事になりました。

我が国では、戦後の商船の定員は40～50名前後でした。各部の構成は、船長・機関・無線・事務・船医でした。昭和30年（1955）後半より、高度経済成長期に入ると共に、人件費、維持費等が増額し、この経費抑制策として「便宜置籍船」・「マルシップ船」と称する形態の運航が始まりました。

（註、便宜置籍船とは、日本国籍船舶を所有するオーナーが、例えばリベリア・パナマ等の外国籍に変更し、全船員を外国人で運航する船舶。マルシップ船は、日本人と外国人船員を混乗させ、逐次に日本人船員の乗船比率を減じる船舶。）

これにより、海員組合は全船員の定員削減案について、外航船主協会と対立、昭和47年（1972）4月17日、ストライキに入り、100日後に交渉は妥結しました。通信士の定員の妥結内容は、外国船と同じ1名としました。併し、急な定員削減による失職者を抑制する措置として、一時的に定員2名になりました。この他に事務長及び船医が定員外になり、通信長が事務長を兼務する事になりました。

私は、昭和47年（1972）3月、22年間の漁船通信長を去り、北米西岸航路の貨物船の2等通信士として乗船しました。通信士は通信長と私の2名で、執務時間は16時間でした。乗船したこの7000トンの貨物船には、他社の外航船に設備されていた国内専用の船舶電話、気象FAX受信機等はなく、本船は日本周辺を航海中でも対外通信は全てモールス通信、天気図は手書きでした。

この時すでに通信長は事務兼務しており、入出港用の使用別に、検疫・入管・税関への提出書類を準備しておりました。

目的港に入港すると、先ず検疫官による乗組員の病人の有無の尋問、衛生検査の立合、次に入管の入国検査、最後に税関の関税品の管理状態、禁制品の有無、食料品の保管等を検査して、これで各官憲による検査は全て終了でした。また航海中、通信長より「これからの無線部は事務系の仕事も勉強しなさい」と言われましたが、その必要性を実感しました。

約2ヶ月の航海を終えて、5月16日（沖縄返還の

翌日) 日本に帰港しました。帰宅して新聞で、沖縄・琉球海運の通信士募集を知り、履歴書を送りました。面談で採用が決まりましたが、さきの貨物船での私の身分は、融通船員で契約期間が残っていましたが、本採用であればと了解を戴きました。

琉球海運には、14~15名の通信士がおりましたが、1級が3名で、この内の1名は特科4期卒の先輩でした。今回の通信士の採用は、沖縄が日本復帰により、日本の法令が適用される事、5000トン以上の客船建造の予定で、上級免許者の増員が必要事情のようでした。昭和50年(1975)、沖縄海洋博覧会の開催に合わせて、大型客船が新規に就航し、通信士の追加募集があり、本校より専攻科卒の2名が入社しました。

復帰による観光客、沖縄からの修学旅行などで船客の利用者は多く、船内からの通信手段は、無線電報によるしかなく、電報の取扱い数は多かったです。この状況も、航空便の増加により、船客は次第に減り、事務長は定員外に、通信長が事務を兼務しました。またVHF沿岸自動船舶電話の設置により、これ以降は船客の電報の発信はゼロとなりました。

平成二年(1990)3月、博多~麗水(韓国)間の国際航路開設要員として、麗水へ派遣され、現地当局の通信担当官と、港湾事情及び通信方法等の事前打合せをしました。就航船は6000トン、船客定員600名、国際航路の就航のため、無線局種別は1種局に該当するため、無線従事者の定員は3名を要するとの事でしたが、航行区域が短距離のため、2名の定員で承認されました。

4月10日17時、福岡県知事、韓国領事、貴賓客、観光客ら約300名が乗船しての博多~麗水間の処女航海です。船内で祝賀パーティが開かれ、接待役と無線当直もしましたが、昔の話に「船乗りさんは民間の外交官」と聞かされた言葉を思いだし、少しはそんな気分にもなりました。

通信関係は、港務通信が主で、博多・麗水の両港ともVHF国際無線電話16CH(156.8MHz)、公衆用は自動船舶電話で支障なく、モールス通信の送受信はありませんでした。航海中は入港までの当直で、沈黙時間・安全航海のための聴取は行いました。

その後、沖縄航路の利用客の増加は見込めず、琉球海運の全客船の代船を、貨物フェリー化する構想が出始めたのを機に、OB期間を含め20年あまりの

勤務でしたが、琉球海運を平成5年1月1日付をもって無事退職しました。在職中は本校卒の先輩・後輩諸氏のご協力を戴き深謝しております。

平成8年(1996)7月30日、外務省の支援作業で色丹島(北方四島)で、プレハブの幼稚園建設に参加しました。この事業の参加者は外務省事務官・ロシア語通訳の各1名、船員10名、作業員24名の計36名でした。就航船は大島商船学校の練習船で、部分改造した350トンの船でした。

私の業務は、入出国の手続き、給食準備、作業現場からの連絡待ち受け当直、毎日17時に釧路海上保安部へ現地の気象、全員の健康状態の報告等でした。

船は穴間港内に停泊中で、船員以外は作業のため上陸し、作業終了後は帰船します。船内で入浴、食事をすませた後は自由でした。停泊、工事期間中の病人の発生には特に注意しつつ、工事は計画通りに進み、8月20日、ロシア側に引渡し、同日、花咲港に帰港しました。

平成9年(1997)11月8日、運輸省航海訓練所の練習船「青雲丸」がフィリピンへ売船になり、通信長兼事務長で乗船しました。青雲丸は建造後29年を経過しており、船名の命名者は「中曽根康弘元首相」です。船は浦賀ドックに入渠中でしたが、このドックは、徳川幕府末期に榎本武揚の建設と言われる歴史あるドックです。

11月11日、無線検査を合格し、11月13日、予定通りドックを出港し、マニラへ向かいました。回航要員は船長を含め12名、半数以上が訓練所で教鞭をとっていた錚々たる顔ぶれでした。11月19日、マニラ港に無事入港。引渡しは順調に進み終了しました。11月22日、マニラ空港を出発、関西空港着で回航要員としての役目を終え、解散しました。

青雲丸は、私にとって最後のモールス船であり、最終航海となりました。冒頭に「青雲の志を抱き・・・」と記しましたが、これで長い海上勤務でのモールス符号ともお別れです。胸にジーンと迫るものがありました。

ここまで、本校入所からモールスの消滅を、私の船舶通信士として歩んできた道程で綴り、恐縮に思います。時の流れと電波技術の新たなる進歩には逆

られません。在学中を思い出す時、受信の試験の際、先生がキーを叩く、生徒たちは受信紙に全神経を集めます。送信符号が少しでもカスレると動揺したもので、まさに真剣勝負の心地でした。それでも免許証を手中に収め、選んだ職場が船舶通信士。

電磁波の解明以来、長波・中波・短波を使用したモールス通信でしたが、周波数・時間帯など、選択による不便がありました。

GMDSSの導入で、VHF無線電話・デジタル通

信・衛星通信・自動受信装置などの設置により、24時間聴取の体制が完備され、海域を問わず通信が常時使用が可能になるなど。この利便性が全世界に網羅されたことで、これまで唯一の対外通信手段のモールス通信の消滅は、必然の理と思います。

短い外国航路の体験でしたが、異国の文化、友情に接しながら電鍵を叩き、モールス符号と共に歩んだ人生、十分に価値あるものだったと思いつつ筆をおきます。



〈 図 書 館 利 用 案 内 〉

◆開館時間・休館日

平 日	4月～9月 10月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の平日	8：30～20：00 8：30～19：00 8：30～17：00
土 曜 日	4月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の土曜日	10：00～16：00 休 館
休 館 日	日曜日、祝日、12月28日～1月4日	

◆貸出について

貸出しの種類	借受者	貸出期間	貸出冊数
一般貸出	教 職 員	1カ月間	5冊以内
	学 生	1週間	3冊以内
	一般利用者	1週間	3冊以内
長期貸出	学 生	春季、夏季、冬季休業期間中	5冊以内
	卒業及び特別研究生	2ヶ月	5冊以内

- 図書を借りるときは、借りたい図書に学生証を添えてカウンターに係員に申し出て下さい。
- 図書を返却するときは、カウンターの係員に返却して下さい。

◆注意事項

- 図書、雑誌等は無断で持ち出さないこと。
- 館内では静かにすること。
- 館内では飲食はしないこと。

お 知 ら せ

◆校内読書感想文・作文コンクール

図書館では例年、読書感想文・作文コンクールを実施しています。このコンクールには奨学後援会の協力を得て、図書券を副賞としています。

最優秀作	1点	図書券1万円分
優秀作	3点程度	図書券6千円分
佳作	10点程度	図書券4千円分

作品の募集は、7月から8月にかけて行っておりますので、多くの募集をお待ちしております。詳細については図書館に掲示します。

なお、新1・2年生につきましては、国語科からの春休みの宿題としての読書感想文も対象となりますので、力作をお願いします。

◆卒業・修了予定の学生へ

- 貸出中の図書は早めに返却して下さい。
- 未返却の学生は、卒業・修了判定会議にその旨報告します。

ベストリーダー

(2009/04~2009/12 英文多読用図書を除く)

分類0

貸出回数	書誌情報
10	死ぬかと思った／林雄司 (Web やぎの目) 編：1
9	やさしい Java /高橋麻奈著
9	Eclipse 3 +Visual Editor による Java プログラミング/プロジェクトウィルカ著：Eclipse3.2対応
9	死ぬかと思った／林雄司 (Web やぎの目) 編：2
7	ITRON プログラミング入門：H 8 マイコンと HOS で始める組込み開発/濱原和明著

分類1

貸出回数	書誌情報
4	心は機械で作れるか/ティム・クレイン著：土屋賢二監訳
4	細野真宏の数学嫌いでも「数学的思考力」が飛躍的に身に付く本！/細野真宏著
4	草食男子の診断書/一番町☆草食肉食研究会著
4	肉食女子の診断書/一番町☆草食肉食研究会著
3	ブタのいどころ/小泉吉宏著

分類2

貸出回数	書誌情報
5	Island story：終わらない夏の物語/高橋歩著
5	オーストラリアで犬の字/小栗左多里著 トニー・ラズロ著
3	昭和二十年夏、僕は兵士だった/梯久美子著
2	ゲバラ最期の時：CHE GUEVARA /戸井十月著
2	わたしは、なぜタダで70日間世界一周できたのか？/伊藤春香著

分類3

貸出回数	書誌情報
9	わかる！一般常識問題：SPI 対応問題収録/就職対策研究会編 ['10年度版]
7	超速マスター！新面接スーパー攻略/渡邊剛著 ['09年度版]
5	超速マスター！SPI 無敵の解法パターン/伊藤誠彦著 ['09年度版]
5	内定者はこう書いたエントリーシート・履歴書・志望動機・自己PR 完全版/坂本直文著 ['10年度]
5	新しい学士をめざして：実践的学修のガイドブック/大学評価・学位授与機構学位審査研究部編

分類4

貸出回数	書誌情報
20	赤外線吸収スペクトル：定性と演習/中西香爾 Philippa H Solomon 古館信生共著
14	新編高専の数学：問題集/田代嘉宏編：2
12	詳解電磁気学演習/後藤憲一 山崎修一郎共著
6	表面科学入門/小間篤ほか著
6	よくわかる電磁気学の基本と仕組み：電気の仕組みを数式で理解する！/潮秀樹著

分類5

貸出回数	書誌情報
16	第一級陸上特殊無線技師試験集中ゼミ/吉川忠久著
14	無線工学の基礎/安達宏司著
11	図解でわかるはじめての電子回路/大熊康弘著
10	乙女の教科書/おおたうに著
8	無線工学 A /吉川忠久著

分類6

貸出回数	書誌情報
3	世界のかわいいパッケージ/ m&m&m's 著
2	図解売れる色とデザインの法則：色・形・パターン・配置に潜むロングセラーの秘密/高坂美紀著
2	すごい店のすごい売り方！なぜあの店には人が集まるのか？/桑原聡子著
2	涙のシャンパー：美容室で出会った人生を変えた15の物語/松本望太郎編
2	iPhone 情報整理術：あなたを情報“強者”に変える57の活用法！/堀正岳 佐々木正悟著

分類 7

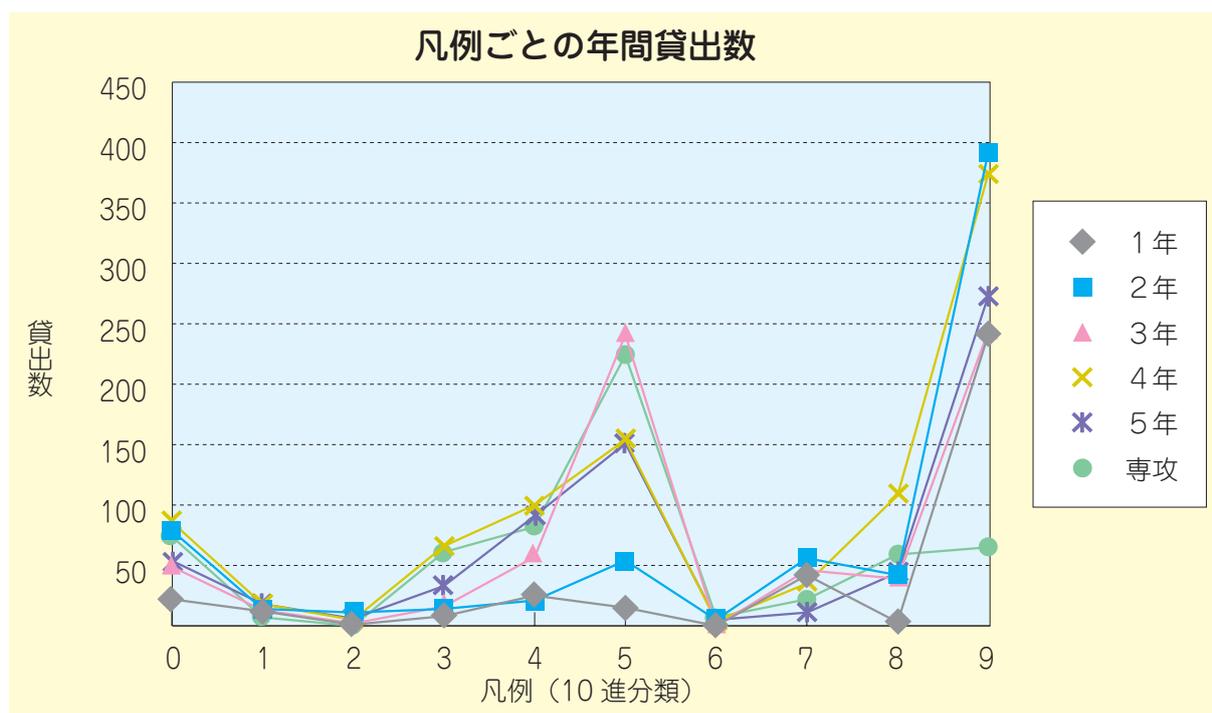
貸出回数	書誌情報
7	銀河鉄道の夜／宮沢賢治原作：バラエティ・アートワークス企画・漫画
7	こころ／夏目漱石原作：バラエティ・アートワークス企画・漫画
7	蟹工船／小林多喜二原作：バラエティ・アートワークス企画・漫画
7	ゲームプログラマになる前に覚えておきたい技術／平山尚著
6	人間失格／太宰治原作：バラエティ・アートワークス企画・漫画

分類 8

貸出回数	書誌情報
12	英検 2 級の英単語こうすれば速く覚えられる！／池田和弘著
12	TOEIC Test 英文法完全バイブル：文法書は全部読むな！／瀧本将弘著
10	日本人の知らない日本語：なるほど×爆笑の日本語再発見コミックエッセイ／蛇蔵 海野凧子著
7	新 TOEIC テストここで差がつく英文法／山口智子著
6	TOEIC テスト新公式問題集／Educational Testing Service 著

分類 9

貸出回数	書誌情報
14	1 Q84 (ichi-kew-hachi-yon) : a novel／村上春樹著 book 1
12	別冊図書館戦争／有川浩著 徒花スクモイラスト 2
12	ハリー・ポッターと死の秘宝／J.K. ローリング作 松岡佑子訳 上
11	ジョーカー・ゲーム／柳広司著
11	少女／湊かなえ著



(平成21年1月～平成21年12月)

10進分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
凡例	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	
1年	22	12	1	8	25	15	0	42	3	241	369
2年	79	14	11	14	21	54	5	56	42	392	688
3年	49	13	2	16	57	241	0	46	39*	244	668
4年	86	18	5	66	100	154	4	35	108	374	950
5年	54	18	6	33	91	151	5	11	44	273	686
専攻科	74	7	0	61	82	224	7	22	59	65	601
合計	364	82	25	198	376	839	21	212	256	1589	3962

* 多読書を除く

「図書館だより」編集担当委員

図書館長	三好正純
図書館運営委員	下田道成
情報工学科5年	梅本雅之
情報通信工学科5年	小西遼

編集後記

1月13日の熊本地方は、朝起きたら一面の銀世界、26年ぶりに7センチという積雪を記録しました。これもラニーニャ現象による異常気象でしょうか。まだまだ寒い日が続きそうですが、そういう時期はぜひ「読書の季節」としたいものです。国立高等専門学校機構がまとめた「国立高専の整備について～新たな飛躍を目指し」に基づき、高度化再編による熊本高専の設置が決り、熊本電波高専図書館だよりは今年度から熊本キャンパス図書館だより『くぬぎの森』に名前を変更して発行することになりました。

今回は読書や図書館をめぐる随想を図書館長の三好先生、人間情報システム工学科の村上先生、回想記を電波高校卒業の宮都政一氏からそれぞれ御寄稿いただきました。高度化再編により図書館の新たな飛躍を目指し、三好先生の「これからの図書館」、人間の生き方・考え方について民俗学の観点から詳解された村上先生の「南の島へ行こう」、時の流れと電波技術の進歩のなかで船舶通信士として歩んでこられた卒業生の《電波》についての回想記「さらばモールス船」、また、昨年からはまった学生諸君の随想を含め、読書を通して、これからの学生の皆さんの人生の参考になればと思います。

校内読書感想文コンクールの選考結果、及び入選作品を例年通り掲載しました。審査員の先生方、御選考ありがとうございました。選考を通して学生諸君の豊かな感性に触れることができました。最後に<図書館からのお知らせ>のページに、図書館の利用案内、図書館の利用状況、その他の情報などを掲載しましたので御一読いただき、教職員及び学生の皆様に気軽に御利用できる場としてぜひ図書館を活用していただければと存じます。

図書館運営委員 下田 道成